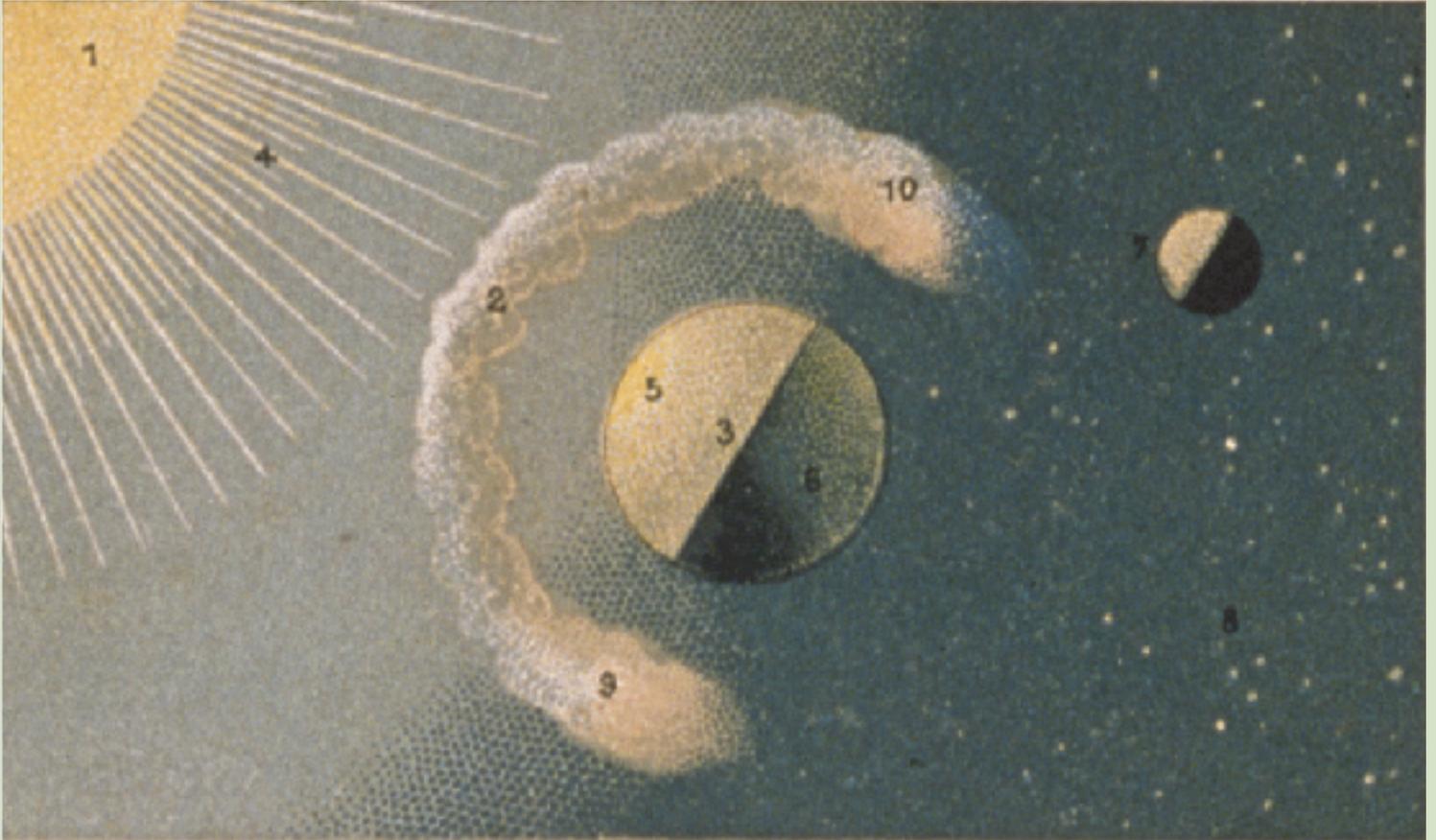


筑波大学開学30周年（創基131年）記念

附属図書館貴重図書 特別展



Joan. Amos. Comenii *Orbis pictus*, 1683, プラハ





筑波大学開学30周年（創基131年）記念

附属図書館貴重図書 特別展

会期 平成15年9月29日（月）～10月10日（金）
会場 筑波大学中央図書館貴重書展示室
主催 筑波大学附属図書館

御挨拶

筑波大学は、本年、開学三〇周年（創基一三二一年）を迎えました。附属図書館ではこれを記念して、収蔵貴重図書の特別展を開催いたします。

筑波大学附属図書館は、前身である東京教育大学附属図書館の蔵書を引継ぎ、一九七三年（昭和四八年）、開学と同時に設置されました。以後、体育・芸術図書館、医学図書館、大塚図書館（東京）、図書館情報学図書館の四専門図書館を順次併設させ、現在は和洋書約二四一万冊、和洋雑誌二二二五九種、総面積一九六六八㎡、総座席数二二七二席に、研究室六七室、セミナー室一五室等を設ける、国内有数の大学図書館に発展しております。その間、一九七九年（昭和五四年）にはTULIPSによる電算処理を開始、一九八一年（昭和五六年）にはオンライン蔵書検索サービスを開始、一九九八年（平成一〇年）には電子図書館システムを導入するなど、新時代の大学図書館として機能強化を図るとともに、他の大学図書館に先駆けて土・日・祝日開館、図書館ボランティア導入を実現するなど、サービスの向上にも努めてまいりました。今後も、学内・地域における学術情報の中核として、その責任を果たしていく決意です。

設置三〇周年を機に、このような附属図書館の一面をお知りいただくため、前身校以来、永い年月をかけて収集された貴重図書のうち、学術的・文化的価値の高いもの、多くの方々に関心を持っていただだけそうなものを選んでお目にかけることといたしました。開学記念日を含む二週間、ぜひ中央図書館まで足をお運びいただき、展示をお楽しみいただくとともに、附属図書館の歴史と現在についても御理解いただきますよう、御案内申し上げます。

平成一五年九月

筑波大学附属図書館長 林 史典

目次

御挨拶

筑波大学附属図書館の貴重図書について 2

日本文学の貴重図書 和歌と物語 4

解題・図版

古代の学問に関する貴重図書 21

解題・図版

近代ヨーロッパと知の革命 26

解題・図版

筑波大学附属図書館関係年表 一三一年の歩み 34

表紙 コメニウス『世界図会』一八八三 プラハ

筑波大学附属図書館の貴重図書について

筑波大学附属図書館は、蔵書約二四一万冊のうち、七五八一冊(点)を貴重図書・準貴重図書に指定しておりますが、その指定基準は一般に広く採られている考え方を参考として定めており、次のようなものを貴重図書としております。

(和書)

- ・ 慶長以前(一六一四)の写本、またはそれ以後の写本のうちの資料的・芸術的価値が高いと認められるもの。
- ・ 慶長以前の刊本、またはそれ以後の刊本のうちの資料的・芸術的価値が高いと認められるもの。

(中国書)

- ・ 清代以前(一九一一)の写本、またはそれ以後の写本のうちの資料的・芸術的価値が高いと認められるもの。
- ・ 明代正徳以前(一五二二)の刊本、またはそれ以後の刊本のうちの資料的・芸術的価値が高いと認められるもの。

(朝鮮書)

- ・ 李朝期以前(一九〇〇)の写本、またはそれ以後の写本のうちの資料的・芸術的価値が高いと認められるもの。
- ・ 李朝期以前(一九〇〇)の刊本、またはそれ以後の刊本のうちの資料的・芸術的価値が高いと認められるもの。

(洋書)

- ・ 一八五〇年以前の写本、またはそれ以後の写本のうちの資料的・芸術的価値が高いと認められるもの。
- ・ 一八五〇年以前の刊本、またはそれ以後の刊本のうちの資料的・芸術的価値が高いと認められるもの。

(その他)

- ・ 古文書・古地図・錦絵等のうち、資料的・芸術的価値が高いと認められるもの。

また、以上の基準を満たさないものであっても、これに準じた価値を有すると見なされるもの、あるいは特定の集書として一括して取り扱うことにより資料的価値が生ずるもの等は、準貴重図書として貴重図書と同等の扱いをしております。

国立大学附属図書館の貴重図書は、通常、長年の多分野にわたる學術書籍収集の結果として生まれます。筑波大学附属図書館の貴重図書・準貴重図書もまた、筑波大学としての書籍収集の結果であると同時に、明治五（一八七二）年開設の師範学校以来の前身校の蔵書を引き継いでいることから必然的にこれらの前身校の性格と歴史が蔵書構成の中に反映されており、和書では文学・言語、歴史、教育等の分野に、洋書では文学、教育、哲学等の分野に優れた古書籍を有しております。一例を挙げれば、『文字反（鎌倉時代初期写）』『悉曇要決（天福二年一二三四写）』『韻鏡（応永元年一三九四写）』をはじめとして悉曇・韻学関係文献にはきわめて貴重なものが多数集められております。日本古典文学の写本では、『六百番歌合』の最古の写本のほか『新古今和歌集』『平家物語』『新撰菟玖波集』などに重要な伝本を有しています。また洋書では、世界で四冊しか所在が知られていない『原マルチノの演説』（一五八八）や『コリヤードの三部作』（『日本文典』『羅西口辞典』『日本告解集』、いずれも一六三二）などの海外キリシタン版をはじめとする『コメニウス関係資料約二四〇点からなるコメニウス文庫、チェンバーズの『サイクロペディア』（一七二八）やデイドロ・ダランベールの『百科全書』（一七五二〜八〇）等の百科事典のコレクションにも特色があります。

これらの書籍およびその複製の一部は、中央図書館貴重書展示室における常設展示等で公開してきましたが、特に近年では平成七年の「天正少年使節と『原マルチノの演説』」以来、平成十四年の『学問の神』をささえた人びと〜北野天満宮の文書と記録〜」にいたるまで毎年様々なテーマで特別展を開催しており、多くの方々に見ていただいています。この度は、筑波大学開学三〇周年を記念して、古代からの日本の学問と文学、および近代ヨーロッパの知を映す貴重図書の中から主要なものを選んで展示することといたします。

日本文学の貴重図書

— 和歌と物語 —

今に残る文学の貴重図書は、作品が誕生してから今日に至るまで、それがどのように読まれ、そこからいかなる新たな文学が生み出されてきたか、創造と享受の歴史を語ってくれる。

漢字から仮名文字を作り出した古代の日本人々は、自由な言語表現の手段を持つことになった。一〇世紀初頭、和歌の勅撰集として初めて『古今和歌集』が編まれると、和歌は宮廷文芸の中心となり、『新古今和歌集』成立までの三百年間に、八つの勅撰集が編纂された。それと並んで自撰・他撰による個人の歌集が編まれ（『清少納言家集』『散木奇詞集』『長秋詠草』）、歌合も盛んに行われて（『六百番歌合』）、より高い芸術性が追求されてゆく。さらに和歌は、連歌や俳諧といった新たな形の文芸（『新撰菟玖波集』『賦何船連歌』『奥州名所百番誦諧発句合』）を生み出してゆくのである。

一方、仮名文字の発達は、歌物語や作り物語（『大和物語』『うつほ物語』）、日記文学（『遊糸日記』）、説話、軍記物語など、散文文学を大きく発展させてゆく。成立した作品は忠実に書写される他に、佳句や秀歌の朗詠（『和漢朗詠集』）、絵画を伴った鑑賞（『住吉物語絵巻』『しゃかの本地』『文正草子』）、読解のための注釈書や梗概書（『伊勢物語聞書（肖聞抄）』『源氏小鏡』）など、さまざまな形で享受されていた。『平家物語』は語りとともに流布し（『八坂流平家物語訪月巻』）、謡曲や狂言は節や演技とともに後世に伝えられてゆく（『謡本』『問之本』）。また近世以降、木版印刷の普及と精巧な製版技術に基づく幅広い出版活動によって、書物は庶民の手に入りやすいものとなり、文芸の質と享受のありようは大きく変容していったのである（『伊曾保物語』『遊子方言』『合三国小女郎狐』『南総里見八犬伝』『鯨絵』）。

ここに展示した貴重図書から、我々は古代から脈々と続く文学の営みと、人々の豊かな叡智の実相を見ることができるのである。

一 古今和歌集（こきんわかしゅう）二〇巻 二帖

〔江戸時代初期以前〕写。伝世尊寺行尹筆。

縦二三・五cm、横一五・八cm。綴葉装。

『古今和歌集』は、延喜五（九〇五）年、醍醐天皇の命を受け、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑らが撰したわが国最初の勅撰和歌集。全二〇巻、約一〇〇首の歌を収める。成立後、各時代を通して第一級の作品として享受され、写本も多い。平安時代の書写と思われるものだけでも筆跡で区別すると三〇種以上現存するが、断簡で残るものが多い。

本書は、緑地に菱花模様の布表紙、見返しは金箔紙の美麗本。真名序を有し、上巻末に「正和元（一一三二）年六月一日校合畢／同年十月三日以宗匠民部卿為世本重校合畢」、下巻末に「本云／応長元（一一三二）年十一月 日／以家本雖為悪筆書写畢／朱点此同也／左近衛権少将藤原朝臣 在判」「宗匠本云／延慶四（一一三二）三月 日於二条宿坊書写了／以件本重正和（一一三三）年十月四日校合了」等の奥書と、世尊寺行尹筆とする烏丸光広の極書が見える。行尹は三蹟の一人藤原行成を祖とする書流十三代。貞和六（一一三五〇）年没。

二 和漢朗詠集（わかんろうえいしゅう）二巻 二冊

元龜三（一一五七二）年写。

縦二六・五cm、横一八・六cm。袋綴。

『和漢朗詠集』は、平安中期の和漢兼作の文人、藤原公任（九六六～一〇二四年）が、和歌と中日の漢詩文の秀句との中から朗詠に相応しいものを、『千載佳句』などの部立を参考ににして部類別に編集したもの。寛弘九（一一〇二）年頃に成立。上巻は春・夏・秋・冬の各部、下巻は雑部とする。各部においては、上巻は歳時を先に季節的風物を後にして六十六題を立て、下巻では風・雲・晴・暁（天象）などと、類聚意識をもって四十八題を立てている。漢詩文では、中国では白居易、日本では菅原文時が重視されており、平安時代中期の文人の嗜好をよく反映している。一方、和歌は紀貫之の二六首を筆頭に、凡河内躬恒（二一首）、柿本人麿（八首）が続ぎ、『古今和歌集』の撰者としての貫之・躬恒に対する公任の傾倒がうかがわれる。

本書は全体に朱墨によってヲコト点・声点・訓が付されている付訓本であるが、詩文の作者名・詩題などの注記は、伝藤原公任筆卷子本などと等しく書かれていない。系統は明らかでないが、四九番の後に嘉禄本のみに見られ諸本にない「い

ざけふは』の『古今和歌集』九五番歌があり、嘉禄本との近縁性がうかがわれる。伝来も不明だが下冊末尾に「当年十二月書已 本主法久寺」と見える。

三 清少納言家集（せいしょうなごんかしゅう） 一巻 一軸

〔江戸時代初期〕写。伝釈契沖筆。

紙高二一・二cm。料紙九枚つき。一紙の長さ二八・五cm。

清少納言の家集。後人による他撰歌集で、成立年時未詳。清少納言は清原元輔の娘で、正暦四（九九三）年頃、一条天皇中宮藤原定子のもとに出仕し、『枕草子』を著した。三十六歌仙の一人で、『後拾遺和歌集』以下の勅撰集に一五首が入集する。家集には日常的な贈答歌が多く、『枕草子』に見られる繊細で鋭い自然観はうかがわれない。

現存する伝本は、流布本系（短歌二九首、連歌二首）と異本系（短歌四二首）に大別されるが、本書は流布本系。内題に続いてすぐ歌が記されるが、流布本系を代表する宮内庁書陵部蔵本には第一首の前に「言葉やぶれて見えず、異本にて書くべし」とあり、本書も本来は詞書があったものと思われる。識語に「烏丸家の本を借りて急ぎ写すノ誤写何かあらん 正歎不 契沖書」とある。

四 散木奇詞集（さんぼくきしゅう） 一〇巻 二冊

〔江戸時代初期〕写。

縦二七・五cm、横二〇cm。袋綴。

『散木奇歌集』は、平安時代歌人源俊頼（通説によれば、天喜三（一〇五五）年大治四（一一二九）年）の自撰歌集。俊頼は、歌人・歌学者であった父経信の歌才を受け継ぎ、堀河朝歌壇を中心に活発な活動を展開、指導的な役割を果たした。歌学書に『俊頼髓脳』がある。彼の歌風は新古今時代の歌人にも大きな影響を与えたとされる。白河法皇より命を受けた『金葉和歌集』（第五勅撰集）の撰進が終わると、以前から手がけていた自歌の整理集成にかかり、大治三（一一二八）年頃、一〇巻一六二二首からなる本集を完成させた。これにより歌境や歌詞の拡充と充実をめざした俊頼歌の全貌を知ることができる。また伝統的な歌語の範疇を越えた俗語・奇語など、他文献に見られない語彙を含む点でも注目される。

本書は、阿波国文庫（徳島藩蜂須賀家）旧蔵本。後に関根慶子氏の所蔵となり、一九八九年本学に寄贈された。諸伝本中、欠歌を持たない唯一の写本である。なお下冊巻末に、『基俊集』一九丁を合綴する。

五 長秋詠草（ちようしゅうえいそう） 三巻 一帖

〔室町時代中期〕写。伝姉小路基綱筆。

縦二六cm、横一六・八cm。

『長秋詠草』は、藤原俊成（永久二（一一一四）年）元久元（一二〇四）年の家集。俊成の最終官職である皇太后宮大夫にちなみ、皇后宮の唐名「長秋宮」に拠る集名。仁和寺守覚法親王の求めに応じて自撰され、進献されたもの。掲出の当館所蔵本末尾に、俊成の、「治承二年三月、随思出、注之。尚、落失多歎。後見有恥。早破々々。沙門釈阿」という元奥書があり、一一七八年、俊成六四歳の折の撰集と知れる。

当館所蔵本の箱蓋裏の貼紙に、「姉小路基綱卿ノ長秋詠草（印）」とあり、古筆了雪の極札に「姉小路基綱卿 長秋詠草 了雪（黒印）」とある。基綱は、嘉吉二（一一四二）年）永正元（一一五〇）年の公卿歌人。当館所蔵本の形はこの集の原型で、上巻は『久安百首』と『述懐百首』、中巻は四季・賀・恋、下巻は雑・釈教・神祇・雑の構成を取る。総所載歌数は四七七首。この集は、後に、『右大臣家百首』の付加された類、その類に長歌・文治年間歌群の付加された類、『千五百番歌合百首』の付加された類など、増補されて流布する。

六 六百番歌合（ろっぴゃくばんうたあわせ） 二冊（零本）

上冊 正平頃（一一三四）（一一三七〇）写。盛家筆。

縦一八cm、横一八・三cm。

下冊 応永二四（一四一七）年写。釈宝善筆。

縦一七・六cm、横一八・三cm。

『六百番歌合』は、藤原良経（嘉応元（一一六九）年）元久三（一二〇六）年の主催した、四季・恋各五〇題の歌合。十二名の歌千二百首を六百番に番える。判者は藤原俊成。成立は、藤原定家の家集『拾遺愚草』に「建久四（一一九三）年秋」とある。但し、これが批評開始の年であるのか後日判の完了を示す年であるのか、判然としない。

歌合は、二首の歌を左右に番えて勝負を競う一種の遊戯であったが、徐々に文芸的要素が強くなる。掲出部分のみでも歌合としての完成形態が判る。「恋部一」の五題、一番の番号、題、左右の別、歌人名（主催者は「女房」の呼称で参加）、勝・負・持（引分）の提示、左右の和歌、左右の方人（かとうど）の難陳、判者の判詞と続く。和歌を番い文芸としての優劣を追求する歌論の要素をもつ歌合と

なっている。

当館蔵本は、内題「左大将家百首歌合」。歌合の後半、恋部の二冊の零本。上冊と下冊は別筆、下冊は「寄月恋」一番の左方人難陳の途中からという不完全な本であるが、両冊末尾の奥書、「(上)此一帖先祖盛 / 手跡也。尤於家 / 可令所持者歟 / 永正九(一五二二)」「(下)此本、於讚州宇多津、亡父/盛家書写所也。而、寄/恋部一帖、或人借、不返/問、三条京極草庵/書続了。/ 応永廿四(一四一七)年正月日/桑門宝善(花押)」から、応永二十四年の書写という、現存最古の伝本である。

七 新古今和歌集(しんこきんわかしゅう) 二〇巻 二帖

〔室町時代中期〕写。山崎宗鑑筆。

縦二五・二cm、横一七cm。

『新古今和歌集』は、後鳥羽上皇の下令になる、第八番目の勅撰集。撰者は、源通具等五人。元久二(一二〇五)年三月二六日、竟宴が行われるが、竟宴直後から、院の意思により切継が行われた。院は倒幕を企てた承久の乱によって隠岐に配流されるが、その地でも撰抄を行い、約四百首を切出している。いわゆる隠岐本『新古今集』である。

現存する伝本は切継時代の書写本の系統が多い。掲出の当館蔵本もその流れの伝本である。所収歌は流布本に近いが、巻第十七雑歌中に、『拾遺集』入集の紀貫之歌「幾世経し」が載り、『新編国歌大観』一六〇五番の後方)、先行勅撰集入集歌は切出すのが原則で、この本は切出し直前の姿を保存する箇所があるのであり、貴重である。

掲出本には、古筆琴山の「山崎住宗鑑 新古今和歌集 全部上下二冊」の極札がある。この集は、室町時代の連歌をたしなむ人たちの必携の文献で、連歌師宗鑑(天文九(一五四〇)年頃没)の筆とされるのも首肯される。

八 新撰菟玖波集(しんせんつくばしゅう) 二〇巻 四冊

〔明応八(一四九九)年〕写。三条西実隆等筆。

縦二三・六cm、横一八cm。料紙鳥の子。青地に梅花紋金襴。綴葉装。

『新撰菟玖波集』は、明応四(一四九五)年に成った准勅撰の連歌撰集である。

巻頭の仮名序によれば、二条良基(元応二(一三二〇)年)〜嘉慶二(一三三八)年)の編んだ初の准勅撰連歌撰集『菟玖波集』の後を継ぐ連歌撰集の編集事業を進めていながら、応仁の乱のために果たせなかった一条兼良(応永九(一四〇二)年)〜文明三(一四八二)年)の志をついで、兼良の息である一条冬良(寛正五(一四六四)年)〜永正二(一五二四)年)が編んだものとするが、実際の編集は宗祇(応永二八(一四二二)年)〜文龜二(一五〇二)年)を中心に兼載(享徳元(一四五二)年)〜永正七(一五二〇)年)の協力と三条西実隆(康正元(一四五五)年)〜天文六(一五三七)年)の支援によって進められたと考えられる。宗祇の厳しい選句により、完成期の連歌の到達した高い境地を示す作品が収められており、後世からも模範と仰がれた撰集である。

本書は実隆公記明応八年六月八日の条に「宗祇法師新撰菟玖波集料紙新写事所望自序至秋下 可書之由命之持来 無子細之由諾了」とあるのに相当するとされるもので、明応八年書写本とされる。

九 賦何船連歌(ふなにふねれんが) 一軸

長享元(一四八七)年十一月十三日

一紙の長さ五五・五cm。紙高一八・一cm。八枚つぎ。料紙金泥草木。

下絵打曇薄手鳥の子。

肖柏(句数一二句)の発句、泰謀(句数九句)の脇、宗祇(句数一六句)の第三に始まる百韻連歌。連衆はほかに宗友(句数九句)、宗長(句数一二句)、玄清(句数五句)、恵林(句数一句)、恵俊(句数九句)、宗悦(句数八句)、宗般(句数八句)、重阿(句数三句)、宗恕(句数四句)、盛安(句数四句)のあわせて十三名。巻頭に置かれた「賦何船連歌」によって、この連歌が「何船」の「何」にあてはまる語を詠み込むことを課題とする賦物(ふしもの)連歌であることが示されている。

この連歌の巻かれた年、宗祇は六七歳となっており、翌年長享二(一四八八)年には純正連歌の代表作とされる「水無瀬三吟」を肖柏・宗長とともに興行するなど、すぐれた門弟を育て上げ、連歌師としての円熟期を迎えていたと考えられる。

一〇 奥州名所百番誹諧発句合

(おつしゅうめいしよひやくばんはいかいほくあわせ) 一帖

寛文二二(一六七二)年八月中旬

縦一八・一cm、横二一・六cm。綴葉装。墨付五九丁。

内藤風虎(元和五(一六九)年、貞享二(一六八五)年)が、寛文二二年、五四歳の折りに催した俳諧発句合。風虎・忠知・直重ら二〇名の詠んだ陸奥名所句を左右につがえて百番の勝負とし、判詞を記したものの。判者は松山玖也(元和九(一六三三)年、延宝四(一六七六)年)。

風虎は陸奥国岩城平藩主の家に生まれ、寛文一〇(一六七〇)年父の隠居により藩主となり、以後死ぬまでその地位にあった人物。和歌・俳諧をよくし、俳諧では貞門俳人の重頼・季吟や談林俳人の宗因なども親しく交流し、貞門・談林を併せ呑んだ大名らしい大らかな作風で知られる。判者を勤めた玖也は、はじめ休甫門のち宗因の門に入った大坂俳人で、風虎の招請を受けて寛文四(一六六四)・八・一二年の三度岩城を訪れている。

一一 遊糸日記(かげろつにつき) 二巻 一冊

享和三(一八〇三)年写。清水浜臣筆。

縦二四・八cm、横一七cm。袋綴。

外題「遊糸日記 全」、内題「蜻蛉日記上(下)」。

『蜻蛉日記(かげろつにつき)』は、平安女流日記文学最初の作品。全三巻。作者藤原道綱母は受領階級の娘であったが、権門貴族の藤原兼家と結婚し、道綱を設けた。この日記は、一夫多妻の世にあつて、夫との仲に苦しんだ二十一年間の人生を書き綴っている。現存する写本はすべて近世以降のもので、善本がなく、いずれの写本も誤写誤脱が多い。

本書は清水浜臣(一七七六～一八二四年)の自筆本。書写年代は比較的新しく、また三巻中の中巻を欠くが、数少ない古本系の一本として貴重である。識語には「延宝元(一六七三)年/丑九月下写之」とあるので、親本は延宝元年の書写であったことが知られる。上欄に大きく空白を取り、朱、墨、藍の筆で、契沖本以下数本の校合や書き入れが行われている。京都大学には本書の転写本がある。

一二 伊勢物語聞書(肖聞抄)

(いせものがたりきぎき) 三巻 三冊

(慶長一四(一六〇九)年)刊。嵯峨本。

縦二五・八cm、横一九cm。袋綴。色変り料紙あり。

牡丹花肖柏著作の『伊勢物語』注釈書。中央に「肖聞抄上(中・下)」と題簽がある。内題は「伊勢物語聞書」。宗祇の『伊勢物語』講釈の聞書を基とする注釈書で、題簽の「肖聞抄」は肖柏の聞書という意。文明九(一四七七)年初稿本が成立し、三訂本までの増補がある。本書はその三訂本。宗祇説を中核とする内容で、『伊勢物語』宗祇注の流れの一つ。はじめに題号・作者等についての説を記し、本文では「むかし」「おとこ」「うぬかうぶり」などの見出語を掲げて説明を加える。先学の諸説に従うところもあるが、古注に対しては批判的な記述が多い。肖柏自身の説はきわめて少ないといえる。宗祇の講釈の聞書には他に『伊勢物語宗長聞書』があるが、内容には相違が見られる。

肖柏(嘉吉三(一四四三)年、大永七(一五二七)年)は連歌師で、夢庵・牡丹花・弄花軒などと号す。和歌を飛鳥井栄雅に学び、連歌は宗祇に師事した。『水無瀬三吟』『湯山三吟』などの百韻に加わり、『源氏物語聞書』『弄花抄』など古典の注釈書を著した。

一三 大和物語(やまとものがたり) 一巻 一帖

(江戸時代初期)写。

縦二一・三cm、横一五・五cm。料紙鳥の子。綴葉装。

『大和物語』は平安時代中期の歌物語。作者は未詳であるが、宇多天皇周辺の女房とする説が有力。天曆五(九五)年頃に成立し、一条朝の頃(ほぼ一〇〇〇年前後)に増補されて現存形態になった。歌物語は当時の貴族間に流行し、伝承されていた歌語りを集めて物語化したもの。流布本は一七三段から成り、二九四首の和歌を収める。前半一四六段までは陽成天皇・宇多天皇を中核に、その子女や后妃、および周辺の貴族・僧侶・女房など一四〇余名の和歌にまつわる話を載せる。後半一四七段以降は、生田川伝説・蘆刈伝説・姥捨伝説など伝承説話を中心とする歌物語になっている。

本書は奥書に「此物語全部以愚本周桂法師/終一筆之功数奇深切尤可感嘆/一見之次加老翰而已 逍遙叟判/大永八(一五二八)年秋八月日/以這本令書写校合畢/藤方光(花押)」とあり、三条西実隆(逍遙)の所持本を連歌師の周桂法師

が書写し、それを藤原方光が重ねて転写し校合を加えたものである。『大和物語』の伝本では第一類系統の為氏本系統に属し、大永本と呼称される貴重な善本。

一四 うつほ物語(うつほものがたり) 二〇巻 三〇冊

延宝五(一六七七)年刊。平野広臣自筆書入校合本。

縦二六・三_{cm}、横一八_{cm}。

『うつほ物語』は、『源氏物語』以前の平安前期長編物語。作者、成立年時とも未詳。男性知識人の手になると考えられている。この作品にはよい写本がなく、最善本とされる前田本もかなりの誤脱を含んでいる。

本書は慶長以後の版本であるが、所持者であった平野広臣の詳細な書き入れを持つことで貴重な一書である。彼は朱筆や青筆を用いて、田中道麿本を校合した鈴木朗本と、自身の所持する浜田本(静嘉堂文庫蔵「浜田家秘蔵本」とは別)との校合を行っているが、浜田本は現在所在不明。本書の校合本文によってのみ知ることができる。

広臣は尾張藩医の家に生まれ、家業を継いで江戸藩邸に勤める傍ら、寛政二(一八〇〇)年に本居宣長の門下に入り古典を学んだ。藩士の多くが彼の教えを請うたと言われる。本書に几帳面に記された日付によれば、校合作業は弘化三(一八四六)年から翌年にかけて行われている。六十三、四歳頃だったと思われる。医業に携わりつつ、研究作業に没頭していた様子がかがわれ、物語享受のあり方としても興味深い。

一五 「源氏小鏡」(げんじこかがみ) 二帖

〔室町時代中期〜後期〕写。枳形本。

縦一六・三_{cm}、横一七・二_{cm}。料紙鳥の子。綴葉装。

表紙 黄地の多色花模様(後に付したもの)。

一一世紀初頭の成立当初から多くの読者を得、新古今時代には藤原俊成をして「源氏見ざる歌詠みは遺恨のことなり」と言わしめた『源氏物語』は、全五十四帖、登場人物数百人、七十余年にわたる長大な物語である。そのため、年立て、系図、注釈、梗概書の類は早くから作られた。『源氏小鏡』は、南北朝時代に成立した『源氏物語』の梗概書。主として連歌師の間で読まれたとされる。作者は花山院長親、心敬などの説があるが未詳。桐壺巻から最後の夢浮橋巻までの各巻の梗概と、それぞれの巻の主要語句を取り上げて註釈が中心だが、雲隠巻の名の由

来、並びの巻や宇治十帖による目録など、作品の構造を中世の人々がどのように捉えていたかも知ることが出来る。

本書には添え紙が残されており、表は「夢庵居士肖栢老人筆/源氏小鏡」、裏は中央に「牡丹花老人真跡」とあって、脇に肖栢の経歴を記すが、肖栢自筆の真偽については俄かに断じがたい。

一六 平家物語(へいけものがたり) 一二巻 一二帖

〔江戸時代中期〕写。一方流節付本。

縦二四・八_{cm}、横一八・三_{cm}。

『平家物語』は、成立直後から、読まれる享受と聞かれる享受が平行していた。『徒然草』に「信濃前司行長」が「平家物語を作りて生仏(しょうぶつ)といひける旨目に教へて語らせけり」という伝承が載る。語り先行・筆録先行・語り筆録平行発生等諸説があるが、室町中期以降は、読みと聞きの享受二態が平行して行われていた。その内の語りは、一方(いちかた)・八坂(やさか)の二流派に別れた。覚一(あき)・城一(しろ)の字を名の下に付して師伝を継承した流派が一方流である。

当館蔵『平家物語』の一本、掲出書は、巻第一の「殿上間討」から「願立」に至る十二句に、その一方流の節付の墨譜を付している。掲出の二面は、「二代后」の末尾から「額打論」の前半部分であるが、「思ひきや」の歌に「上歌」の曲節指示、「詢(クドキ)」「初重」「折声」その他の曲節指示が見え、また諸所に「ゝゝゝ」などの墨譜が付されている。当館蔵本には奥書等がなく、書写年代や書写者は特定できないが、江戸時代中期を下らない写である。室町時代末期から江戸時代初期にかけての一方流の琵琶語りの実態を示す、最古の資料の一つである。

一七 八坂流平家物語 訪月巻

(やさかりゅうへいけものがたり つきみのまき) 一巻 一冊

文政三(一八二〇)年写。八坂流譜本。岡正武筆。

縦二四_{cm}、横一六・八_{cm}。

『平家物語』の詞章を琵琶の間奏で語る「平家琵琶」は、早く一方(いちかた)・八坂(やさか)の二流に別れたが、八坂流は、一方流の明石検校覚一(あき)・三七一(年没)の活動による隆盛に押され、江戸時代にはほとんど滅亡した。ただ「訪月」のみ、語りが伝えられ、数多くの写本が残された。当館蔵本は、奥書に、

「右、八坂流訪月巻、於大坂旅館、自星野検校口授、干時文政三(一八二〇)年庚辰十月五日也 岡正武」とあり、また、巻末の長文の跋文の末尾に、「天保十三(一八四二)年九月、六十九老人螢澤齋岡正武」とある。幕府殿中医岡正武が荻野検校門下の星野検校から伝えられた本である。掲出の巻頭部分第一面に見るように、行間に「詢(クドキ)」という曲節指示や、「上」「下」という節回しを指定する墨譜が添えられている。演者はこの曲節指示と譜によって、物語を語る。

当館蔵『訪月』の他に、東京大学文学部国語研究室蔵『平家正節(へいけまぶし)』中『八坂流訪月』、静嘉堂文庫蔵『語平家傳書』の内『八坂流訪月』など、伝本は多い。

一八 「謡本」(うたいほん) 二十七番 二七冊

慶長八(一六〇三)年・同一(一六〇六)年写。観世身愛(ただちか)筆。

縦二〇・七cm、横一四・五cm。袋綴。二重木箱入。

印記 笠家文庫(唐津藩小笠原家)。

謡本とは、能の詞章に節付(いわゆるゴマ点)を傍記した譜本で、能の脚本というより、謡いを学ぶための稽古本としての役割を持っていた。現存最古の謡本は一五世紀の世阿弥自筆本(九番)であるが、謡いが公家・武家・富商など素人に流行した一六世紀中頃から謡本が盛んに筆写され、江戸時代に入ると、当時の印刷技術の進歩と相まって、謡本の出版が盛んとなる。

本書は、能の大成者観阿弥・世阿弥を祖とする観世流九世大夫、観世身愛(ただちか、忠親とも(一五六六-一六二六年))筆写の謡本二十七番である。観世身愛は、祖父観世宗節の薫陶を受け後援者徳川家康のもと、駿府から京都へと進出し、文禄二(一五九三)年には豊臣秀吉から四座の棟梁の一人として配当米を与えられた。

本書は、唐津藩小笠原家(小倉藩主小笠原氏の支族、文化一四(一八一七)年小笠原長昌のとき肥前唐津藩六万石に封ぜられた。)の旧蔵とみられ、漆塗りの二重木箱に入れ秘蔵されていたことが知られる。

一九 問之本(あいのほん) 二帖(五帖之内)

〔江戸時代初期、貞享年間(一六八四-八八)以前〕写。横本。

〔第一帖〕半部ほか三七番。

〔第二帖〕松山ほか八八番。欠落の曲を除いて全一五曲を収める。

縦一六cm、横二一・七cm。料紙鳥の子。綴葉装。洪引表紙。

問(アイ)とは、能の中の役名で、前後二場の能の前ジテ退場後に登場し、前半の能の物語を要約・再説し、後ジテ登場までの間をつなぐ役割を担う。能問(のうあい)、問狂言(あいきょうげん)とも言う。「問之本」とは、その間の役が語るセリフや演技を書きしめた本で、能が成立した室町時代に書きとめられたものはほとんどなく、本書は最古の部類に属する。

本書が「西村本」と称されるのは、(墨で抹消してあるが)末尾の所持者を示すらしい位置に「西村弥三左衛門」と署名があり、この名は貞享四年版の『能之訓蒙図彙』巻四「京都芸者名付(狂言)」の部、村田平右衛門の項にその師の名として記してあることによる。村田・西村とも流派は不明であるが、本書のセリフの内容から大蔵流の間狂言を、役者自身が手控え的に記したものと推定されている。

二〇 「住吉物語絵巻」(すみよしものがたりえまき) 二軸

〔室町時代初期-中期〕作。奈良絵巻。

紙高三三・五cm。上巻は鳥の子の料紙三一枚、下巻は二六枚を継ぐ。一枚の長さ二二・二八cm。挿絵は上巻一一図、下巻一一図。

鎌倉時代の中世王朝物語である改作本『住吉物語』を絵巻仕立てにしたもの。『住吉物語』の内容は以下の通り。四位中将が母を亡くした姫君に求婚するが、継母は自分の娘の三の君と少将を結婚させてしまふ。父親が姫君を入内させようとする。継母はこれを妨害し、七十余歳の主計頭に姫君を盗むよう画策する。姫君は乳母子の侍従とともに亡母の乳母の尼が住む住吉に隠れる。四位中将は長谷寺に参籠して夢告を得、姫君を住吉に訪ねて再会、京に戻って幸福な結婚生活を送った。典型的な継子物語で、貴族恋愛譚的要素と長谷寺靈験譚的要素を含む。

本絵巻は零巻(不完全本)で、上巻は嵯峨野での小松引きの野遊びの場面あたりまで、下巻は住吉の尼君からの返事を得る場面あたりまでの内容。改装補修の際の錯簡補写が見られるが、製作年代が古い貴重な絵巻である。

二二 「しやかの本地」(しやかのほんじ) 一冊

〔江戸時代初期〕写。大型奈良絵本。

縦三三・六cm、横三三・六cm。袋綴。

室町時代に成立した釈迦の生涯を記した御伽草子。僧侶物・本地物。『釈迦本懐伝記』『釈迦物語』とも。表紙・裏表紙ともに欠き、内題もない。古朴素彩色挿絵が豊富で、全九一丁のうち五八面(一面半丁分)ある。

内容は釈迦の過去世から始まり、前生譚としての雪山童子の無常偈聴聞譚、次いで下天・託胎・出胎・出家・降魔・転法輪・涅槃のいわゆる八相成道を順を追って記述する。正統の仏伝や仏教説話集所載の仏伝とは相違し、随所に中世物語としての潤色が施されている。四季の庭園造営などの情趣面、妻子との恩愛に関わる情愛面の強調がそれである。なお、本書は釈迦の涅槃の場面で終るが、古活字本・寛永二十年版本(三冊本)系は釈迦の荼毘、阿難による仏典結集までを記す。

二二 「文正草子」(ぶんしょうそうし) 一軸

〔寛永八(一六三二)年〕作。絵巻。

紙高二九cm、上巻は鳥の子の料紙三六枚、下巻は三八枚を継ぐ。一枚の長さ五〇・五cm(二五丁四〇cmのもの五、六枚あり)。挿絵は上巻一三図、下巻一〇図。

室町時代の御伽草子。庶民物・祝儀物。『塩焼文正』『塩つり文正』『文太物語』などとも。江戸時代初期に奈良絵本・絵巻・版本が数多く製作され、渋川版御伽文庫二三編にも収められている。庶民の立身出世を描いた致富物語として、最も代表的な御伽草子。内容は以下の通り。常陸国鹿島大明神の大宮司に仕えていた雑色の文太は屋敷を追放され、塩屋に雇われて働く。塩釜二つを貰い受けて塩を焼いて売ると飛ぶように売れ、長者となって名を文正常岡と改める。鹿島明神に祈って二女を授かり、娘たちは容姿端麗な美女に成長する。姉妹は関八州の大宮・大宮司の子息・常陸国の国司などから求婚されるが、いずれも受けつけない。噂を聞いた関白殿下の御子二位の中將が京から商人姿に身をやつして下向、文正の邸に逗留する。中將は姉妹と契り、正体を明かして姉妹を伴い帰京する。やがて中將は大將に加階、帝が姉妹と文正夫婦を京に召し出す。姉妹は帝の寵愛を受け皇子を出産、中宮となる。文正は七十歳で宰相となり、妻は二位殿と仰がれ、百余歳の長寿を保った。

なお、本絵巻は上・下巻末に「寛永八年卯月吉日」の奥書を有し、書写年代を明記した絵巻としては現存最古のものである。

二三 伊曾保物語(いそほものがたり) 二巻 三冊

〔寛永一六(一六三九)年〕刊。古活字版。

縦二七・二cm、横一八cm。袋綴。

『伊曾保物語』は、有名なイソップ物語の日本版のことである。文禄二(一五九三)年にイエズス会天草学林で出版されたローマ字によるものと、後に国字で出版された仮名草子とがある。本書は後者にあたる。内容は前半が奇妙な容姿でありながら知恵者である主人公・伊曾保の伝記で、後半がいわゆるイソップ物語の翻訳になっている。

仮名草子『伊曾保物語』は古活字版と整版とがあり、本学には万治二(一六五九)年刊の絵入り整版本も所蔵されている。

また本書には、日本古典籍業界に名声を残す弘文荘反町茂雄(明治三四(一九〇一)年~平成三(一九九一)年)が、自らの古典籍目録に『待買書目』と名付ける由来ともなった、幕末の著名な書肆である達磨屋五一(文化一四(一八一七)年~慶応四(一八六八)年)、『待買堂』の印記がある点も注目すべきである。

二四 遊子方言(ゆうしほうげん) 一巻 一冊

〔明和二(一七六五)~一七七〇〕年間〔江戸多田屋利兵衛刊。小本。〕

縦一五・九cm、横六・七cm。

遊客の遊里での遊びを描いた小冊子。書名は中国(漢)の揚雄の著『揚子方言』をもじったもの。「方言」はここでは吉原の郭ことばのこと。江戸の洒落本流行の端緒となった作品で、会話体を中心に人物描写がされており、以後会話体が洒落本の主流となった。

本書は、後年の刷りではあるが、初印本と同じ版木を元にしたものと推定され、巻末に多田屋の蔵版目録が付されている。遊里の客と遊女たちの会話を写実的に描いており、郭のことば「あい、さつきそう申しんした」「おまへが帰りなんす」とわっっちゃ死にんす(三三丁才)など、江戸の言葉を知る上でも貴重な資料である。

二五 歴聖大儒像（聖賢像軸）（れきせいだいじゅぞう） 六幅

寛永九（一六三二）年、狩野山雪画。寛永十三年、金世濂賛書。

各幅縦一三〇cm、横四四・五cm。紙本着色。花鳥文錦表装。牙軸。

江戸時代初期、寛永九年、徳川義直が上野忍岡（現在のの上野公園の地）に先聖殿（孔子廟。後の湯島聖堂）を建て、林羅山に寄進した。これを機に、翌年、羅山によって、かつて大学寮において毎年二月八月の上丁の日に行われていたもの、応仁の乱以後廃絶していた釈奠の儀式が復興された。これに先立ち、羅山は、釈奠での使用や弘文館（後の昌平坂学問所）で学ぶ子弟への教材も兼ねて、儒教の聖人・賢人二人の肖像画を制作することを企画し、狩野山雪に描くように依頼している。それが現存する「歴聖大儒像」二幅である。さらに、十三年十二月、朝鮮通信使として来日していた金東溟（世濂）が儒者であることを知った羅山は、東溟に二幅の図上に先人の賛語を揮毫してもらうことを願った（「聖賢像軸」『羅山文集』六十四）。羅山が差し出した賛語は、周子から邵子までの五賢人については朱子の賛、朱子については元の呉澄の賛である。

本学に蔵する宋儒六幅は、明治になって学問所が閉じられるまでの間、釈奠の儀式において使用されていたものと思われる。明治四十年、祭祀の途絶えるのを遺憾として、東京高等師範学校（本学の前身）の教官らを中心に孔子祭典会が創設されたとの記録が残る。他の一五幅は現在、東京国立博物館に蔵されている。

二六 鷺峰先生林学士全集（がほつせんせいりんがくしぜんしゅう）

文集一一〇巻目二巻 詩集一一〇巻目三巻 附自叙略譜一卷
一〇五冊

元禄二（一六八九）年刊。

各冊縦二七・三cm、横一九cm。袋綴。

江戸時代初期の儒学者、林鷺峰（名は恕または春勝、鷺峰は号。一六一八〜一六八〇年）の詩文全集。第一冊巻頭に元禄二年八月付の、鷺峰の二男鳳岡による「鷺峰先生林学士全集序」と、鷺峰先生林学士全集凡例」とが置かれている。鷺峰は羅山の三男で、四〇才で林家を嗣ぐ。林家の私塾を幕府の官学のような扱いに昇格させ、後の昌平黌の基礎を築く。また幕命により編纂されていた『本朝通鑑』三二〇巻を、邸内に国史館を営んで、寛文十（一六七〇）年に完成させた。他に『国史館日録』『本朝一人一首』などの著作が知られる。詩文集には外交文書はじめ公的立場によるもの以外に種々の作品があり、文集巻七十七から七十九の

三巻を費やす「西風淚露」は、寛文六（一六六六）年に早逝した長男梅洞を追悼した文章で、個人的な感情の流露を八七段の長文に託したものと見て特徴的である。巻八十六「狩野永納家伝画軸序」（寛文九年）には二五「歴聖大儒像」が羅山によって制作された経緯が記されており、「今に伝へて忍岡の文庫に存す。釈菜（釈奠のこと）ある毎に、聖堂の両廡に陳設す。人々の観るところなり」とあり、「歴聖大儒像」の使用の実際が知られて貴重である。本書は印記より尾張藩校明倫堂払下げ本であることが分かる。

二七 水滸後伝（すいこうでん） 八巻四〇回 一六冊

陳忱（明）著。万曆三六（明一六〇八）年序刊。

左右双辺。無界。各面九行、二〇字。縦二二・二cm、横一五・二cm。

目録題・内題次行に「古宋遺民著 鴈宕山樵評」とある。

版心題：上に「水滸後伝」、下に「元人遺本」。

巻首に古宋遺民原序 論畧。

印記：巻末に合綴した識語に「竜印」「元瑞」の二印。

『水滸後伝』は清初の長編小説。序は仮託であり、「古宋遺民」という名とともに明の滅亡（一六四四年）後、遺民として生きた陳忱の姿を伝える。『水滸伝』を受け、宋江の死後、生き残った三二人の英雄が奸臣に逼られ、海外に脱出する経緯を描く。多くの『水滸伝』の続作のなかもっとも優れる。英国博物館に所蔵される版が原刊本といわれ、本学本には欠ける封面があり、「遺経堂蔵書」という書舗が記されている。本学本は、巻末に「文政十一（一八二八）年秋岳僊（仙の異体字）史竜題」と署した識語一丁があり、小石元瑞（江戸後期の蘭方医。名は竜、号は秋岳）による補筆が数カ所行われている。

二八 笑府（しょうふ） 六巻 四冊

『馮夢竜（ふうむりゅう）（明）著。

〔康熙年間 清 一六六二〜一七二二〕刊か。武陵蔵板。

左右双辺。無界。各面八行、二〇字。縦一八・一cm、横一一cm。小本。

巻首に墨憨齋（ぼくかんさい）主人（馮夢竜の筆名）序。

印記：各冊はじめに「善庵三十年精力所聚」「善昇図書」「林印昌純」の三印。

『笑府』は、明末の俗文学界の大御所馮夢竜の編とされる笑話集。五九九話を一三部に分け、各部のはじめには按語が置かれ、評語も付される。原本は中国で

は早くに散逸し、わが国には内閣文庫と本学に各一部現存する。内閣文庫本は豊後(大分県)佐伯藩の献上本で保存がよいが、封面が欠けている。本学本には、下半分であるが黄色の封面があり、「武陵蔵板」という書舗を明らかにすることができる。なお、右側の「次」は「墨憨齋編次」の末字であり、「笑府」の上部は「序」に見える。「笑」に模して後人が加筆したものと思われる。

二九 南総里見八犬伝(なんそうさとみはっけんてん)

全九輯 九八巻 一〇六冊

〔文化二一(一八一四)年〕天保二三(一八四二)年刊。

滝沢(曲亭)馬琴著。

縦一七・七cm、横一五・七cm。袋綴。

『南総里見八犬伝』は、滝沢(曲亭)馬琴(明和四(一七七七)年)嘉永元(一八四八)年)によって書かれた「読本」といわれる小説の代表的作品である。下総里見家に仕える犬の名を冠する「仁義礼智忠信孝悌」に由来する八人の家臣たちになつたる物語で、二八年の長期にわたり書き続けられた。そのために書肆も途中で山青堂(山崎平八)から湧泉堂(美濃屋甚三郎)、さらに文溪堂(丁字屋平兵衛)へと変わった。絵師も、柳川重信以下数名が交代して担当した。内容が勸善懲惡を基調とするために、時代によって毀誉褒貶もあつたけれども、巷間では人気が高く、国民的文学の一つにあげてもよい作品であろう。

本書は、一部に初版と異なる表紙装丁も見られることから、後刷りのものと推定されるが、保存がきわめてよくて、刊行ごとに工夫された装丁も美しいまま保たれている。江戸時代の場合、こうした本の多くは貸本屋によって人々に読みつがれたため、表紙の破損が激しくて付け替えられたりしているものが多い。そのため、本書のように出版時の原姿をよくとどめているものは珍しいといえる。

三〇 合三國小女郎狐(あわせてみくにこじよるぎつね)

草稿本 二巻六冊 合一冊/刊本二巻六冊 合一冊

草稿本 〔文化二〇(一八一三)年〕写。柳亭種彦筆・画。

縦一七・五cm、横二二・二cm。袋綴。

刊本 〔文政四(一八二二)年〕刊。柳亭種彦著・柳川重信画。

縦一八cm、横二二・三cm。袋綴。

『合三國小女郎狐』は、『修紫田舎源氏』で知られる柳亭種彦(天明三(一七八三)

年)天保一三(一八四二)年)によって書かれた「合巻」といわれる小説作品の一つである。俵藤太秀郷の一子菖蒲の助に金毛九尾の狐の娘である小女郎が恋をして、彼の前に三人の女性に化けて次々と現れるなか、秀郷の元から盗まれた名刀と名宝の探索話もからんでくるという内容である。

作品自体の内容もさることながら、本学の所蔵書は、作者自身による草稿本と刊行本とが双方とも現存している点に注目したい。出版禁令などの関連もあつたのか、草稿本の予定刊記と実際の出版が七年も隔たっていたり、出版元も変わっているなど謎が多い。『筑波大学附属図書館報つくばね』一三巻四号 篠塚富士男「シリーズ資料探訪」19参照。

江戸時代後半の大衆小説が、作者の手元でどこまで加工されて、その後どのような経過を経て出版されていったのかを見ていくうえで貴重な資料であるといえる。

台北帝国大助教授で西鶴研究者として知られる滝田貞治(明治三四(一九〇一)昭和二一(一九四六)年)旧蔵本でもある。

三一 鯨絵(なますえ) コレクション 一三枚

江戸末期摺

縦三七・三cm、横四八・四cm、八枚。

縦四八・四cm、横三七・三cm、一五枚。

安政二(一八五五)年一〇月に江戸を襲った大地震は大きな被害をもたらしたが、この安政大地震を契機に出版された鯨をモチーフとする浮世絵版画を一般に「鯨絵」と呼んでいる。鯨絵の作者や板元はほとんどわかっていないが、例外的に事情がわかる仮名垣魯文の場合、安政大地震の翌日に魯文のもとにやって来た板元が、地震の趣向で一枚摺の原稿がほしいと依頼したので、さっそく「老なまづ」という趣向で作文し、板元がこれを錦絵に仕立てて売り出したところ大評判となり「魯文は五六日の間地震当て込み錦絵の草稿を書くこと四五十枚に及び、皆売口よく」と記録されている。安政大地震後にきわめて短期間のうちに爆発的な種類の錦絵が出版され、またそれがよく売れたことがわかる。描かれた内容は多様であるが、地震を起こした鯨に対する懲らしめを装いながらも、職人たちにとっては鯨は復興景気によって世直しをもたらす存在として描かれるなど、災害という非日常の中での地震に対する庶民感情の変化を反映したものとされている。当館では二枚続きのもの一種を含め、一二種二三枚の鯨絵を所蔵している。

三二 論語集解(ろんごしゅかい) 十巻 五冊

〔室町時代中期〕写。

縦二八・一cm、横一一・八cm。袋綴。

『論語』は、孔子(前五五―前四七九年)とその門人、及び門人同士の対話をまとめた書。漢代までに現行の形に選択整理されたと考えられている。後漢の鄭玄(二七―二〇〇年)が注したが、唐末五代の間に滅び、残巻を見るのみ。鄭玄より三国時代にかけて書かれた多くの注釈もほとんど失われたが、魏の何晏(??―二四九年)の『論語集解』が今日まで伝わっている。鄭玄のテキストに基づき、鄭玄をはじめ孔安国・馬融などの諸家の注を取捨選択し、時に何晏の自説を加えたものであり、完存する最古の『論語』注で、後世には古注として重んぜられ、今の『論語』の祖本となっている。

本書は『論語集解』の本邦最古の版本である正平版の忠実な写本である。正平版『論語』とは、巻末に「堺浦道祐居士重ねて新たに工に命じて梓に鏤らしむ。ノ正平卿五月吉日謹んで誌す。ノ学古神徳楷法日下逸人貫書す」(原漢文)との刊記を持つ本をいう。正平十九(一三六四)年、堺の道祐居士が正平以前にすでに存した日下逸人貫が版下を書した版本を覆刻したものと考えられている。正平版は毎篇首に篇内の章数を記すにあたり、必ずこれを「何晏集解」の下に置く。この書式の特徴などから、関東清原家の祖、教隆写定の本に拠っていることが明らかとなった。中国においては、宋代に『論語正義』が出版されてからは、『論語集解』は単行せずに『正義』に組込まれるか、あるいは再び『正義』から抽出されたものが伝わっていた。その点、日本の古鈔本は唐代の鈔本の姿を伝えており貴重である。本書はこの正平初刻本を覆刻したうえで、その跋文より、最後の一行「学古神徳楷法日下逸人貫書」を削って刊行したいわゆる単跋本を写したものである。ほぼ忠実な写本といえるが、序文の一行の字数、版心の形式は違っている。

三三 論語〔集解〕(ろんごしゅかい) 十巻 二冊

〔慶長年中(一五九六―一六一五)〕京都 要法寺刊。

縦二六・九cm、横一八・七cm。

京都の日蓮宗の寺院、要法寺は慶長年間に『沙石集』『太平記』『文選』など漢仏書に亘っての活版印刷を行なったことで有名である。本書もそのひとつであるが、他と異なり整版本である点の特徴である。これに先行する活版本が存した

かどうかは未詳である。この本も三二『論語集解』と同じく、「何晏集解」の日本の古鈔本に拠ったものであるが、毎篇首の章数を記すにあたって、篇題の下、「何晏集解」の上に記す。この形態上の特徴は文永本・高山寺本などの中原家本系統に顕著に見えるもので、要法寺本の出自を示すものである。また日本の古鈔本の共通した特徴のひとつである述而篇の「君子亦党乎」の五文字の脱文が、この本では補われている。おそらく底本の段階で宋版本などによって補われたものと思われる。なお本学には本書とはほぼ同版と思われる、慶長年中の無刊記整版本が蔵されている。

三四 論語〔集註〕(ろんごしゅちゅう) 零本(巻一) 一冊

元龜四(一五七三)年写。春永筆。

縦二八・六cm、横一九・三cm。袋綴。

南宋の朱熹(一一三〇―一一〇〇年)の主著、『四書集註』(他の三書は『孟子集註』『大学章句』『中庸章句』)のひとつ。『論語集註』の完成は淳熙四(一一七七)年、朱子四八歳のおりである。何晏『論語集解』に代表される、これまでの訓詁を中心とした古注に対して、哲学的体系を持った清新な注であり、以降、新注として『論語』の注釈のひとつの標準となった。

本書は日本における、江戸時代以前の『論語集註』の鈔本としては唯一の伝本である。同種の奥書を持つ僚巻として、渋沢栄一旧蔵の青淵論語文庫(日比谷図書館)に巻二と巻十とが存する。これらの奥書によると、春永なる人物が元龜四年三月より十月中旬まで数ヶ月を要して書写した一〇冊本であったことが分かる。注を本文より一字下げて同じ大きさに書写し、全巻に朱墨による訓点・声点が付してある。この訓法は、五山の禅僧、桂庵玄樹(一四二七―一五〇八年)が創案した新訓法、いわゆる桂庵点と合致しており、本書は『論語集註』の最古の鈔本というばかりではなく、古代・中世の博士家の訓法から江戸時代の道春点にいたる、訓読の歴史の画期に位置するきわめて貴重な資料であるといえよう。

三三・三四の旧蔵者、林泰輔(一八五四―一九二三年)は、明治時代の漢学者で、東京高等師範学校教授。主著として『論語』研究史を体系化した『論語年譜』(一九一六年)がある。その蔵書のうち四書を中心とした六九一部が一九二三年に寄贈され、「林文庫」として収蔵された。

三五 論語集解(ろんごしゅかい) 二冊(零本)

〔明治二十二年・二十四(一八九〇・一八九一)年頃〕重印。

縦三〇・三cm、横二一・七cm。袋綴。

正平版『論語集解』単跋本の刊記を削ったものを無跋本と言う。本書は明治になってから、残存していた無跋本の板木を用いて摺りたいわゆる残板本である。この無跋本板木は江戸時代初期、京都の相国寺に伝わり、江戸時代末期には日本橋書肆千鐘房須原屋が所持したが、明治二十三年(一八九〇)年に帝室博物館の蔵に帰する。東京国立博物館『収蔵品目録』(一九五二年)には「正平版論語版木 三三枚」と著録され、「正平版論語残闕 五冊 版本 美濃判 本館蔵ノ版木ヨリ刷リタルモノ」とも別記されていることから、板木の収蔵後に複数部摺刷されたことがうかがわれる。

本書もほぼ同時期に重印されたものと考えられるが、現存の板木は二八丁分であり、本書は一七丁で数丁の脱落がある。緋色の表紙に「正平版論語 上(下) 止軒署」の題箋を貼り、上冊巻頭に「昭和庚子(一九六〇年)春日 止軒 諸橋轍次(諸橋轍印)」と署した一四三字の一文が合綴されている。そこに「松雲堂主人野田君、往時需め得て珍襲し、多年この拱壁を貴ぶ。頃日来たりて告げて曰く、昌平古本の残骸、敢へて書を茗甕に献ぜん。道統脈々として経を遺し、不朽なることを庶幾せんと。余その志を欽びてその言を奇とす」(原漢文)とあり、もって本書所蔵の経緯を知ることができる。

三六 「古文」尚書(こぶんしょうしょ) 零本(存巻八) 一冊

永正十一年(一五一四)年写。清原宣賢筆。

縦二七・四cm、横二一・四cm。袋綴。

『古文尚書』は四六巻。上代の堯・舜から夏・殷・周の三代にわたる伝承的な歴史を書いた書物。『書経』ともいう。秦の焚書にあつていったん衰微した。前漢にいたり当時通行の字体である隸書で書きたいわゆる「今文尚書」が行われていたが、景帝のとき、魯の恭王が孔子の旧宅を壊したさいに、古い字体の科斗文字(おたまじゃくしに似た文字)で書かれた『尚書』(「古文尚書」)が出てきた。これを孔子の子孫の孔安国が解読して注を書いたといわれるが、今伝わるのは晉代の偽作とされる部分を含む。中国においては、孔安国伝が『尚書正義』に組み込まれてからは、古態の伝承が絶えてしまったのに対して、日本の古鈔本は孔安

国伝の古態をよく残しているといえる。

本書は、全体に朱墨による訓点と墨による校合書き入れとがある。篇目「康誥 第十一」の上に補入記号を付して、「古文尚書 拵(摺) 九本ナ(有)」と記すが、このことは本書が基づいた本が宋版本に近似しており、博士家の証本とは対立していることを示している。総じて、天理図書館蔵の鎌倉時代末期鈔本と近い本文を持つており、別系統の鈔本ということにならう。なお同筆の僚巻である巻七・巻十が京都大学附属図書館に蔵されている。

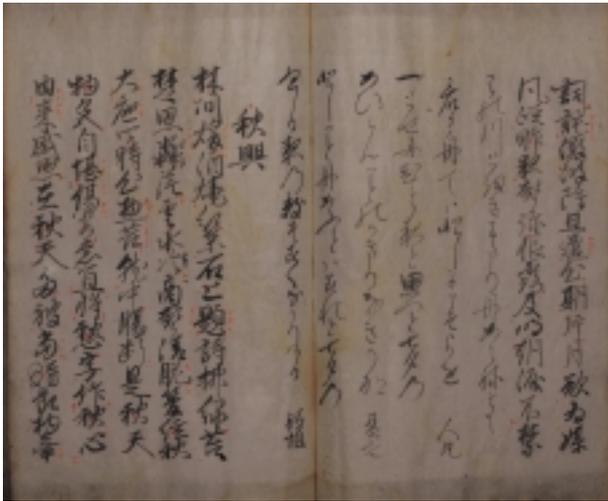
三七 古文孝経(こぶんこうきょう) 一巻 一冊

寛文九(一六六九)年写。葉室頼業筆。船橋経賢加點。

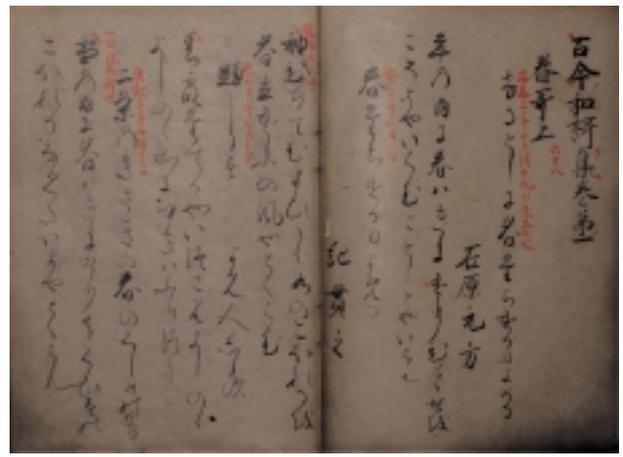
縦三〇・二cm、横二一・五cm。袋綴。

孔子が曾子に説いた孝道が書かれている。曾子の門流の著『論語』と並んで、儒教の基本図書として重視された。今文と古文とが存し、今文に鄭玄注、古文に孔安国伝が伝えられることは『尚書』と同じ。今文は一八章、古文は二二章と章数に相違があるが、古文に閨門章が多いことを除いては、章の分段の差異であつて大差はないといえる。六朝を通じて鄭玄注と孔安国伝との消長があり、ことに隋の開皇十四(五九四)年に孔安国伝が再発見され、劉炫によって校定されて地位を得たものの、当時の儒学者によって劉炫偽作説が唱えられた。現在では『尚書』に同じく、魏晉の間の偽作であるとの考えが有力である。その後唐の玄宗が頒布した御注が主流となり、両注はともに亡失したが、日本においては、御注および孔安国伝が利用され、博士家に古注が伝わることとなった。

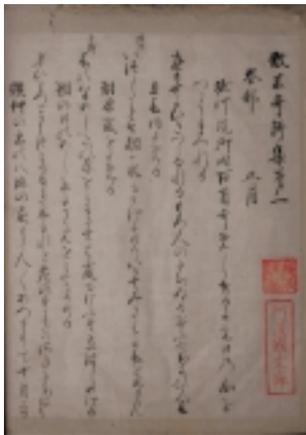
本書は、大題を「古文孝経」とすること、今字で書すこと、「応感章第十七」の「必有長也」の四文字が存することなどによって、清原博士家の一本、鎌倉の仁治本系統の本文であることが分かる。しかし博士家の家本を忠実に写しているわけではなく、仁治本の孤立する箇所などは他本に従っており、中立的な本文となつている。これは恐らく奥書にいう書写者の、依るべき本を作るといふ志向からきているのだらう。



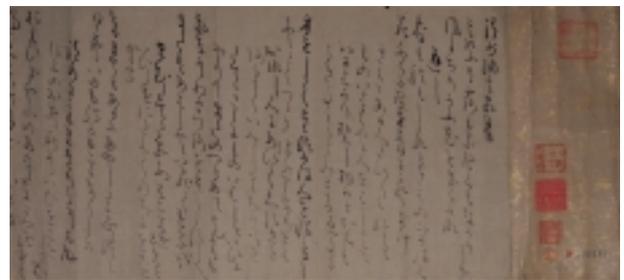
2 和漢朗詠集



1 古今和歌集



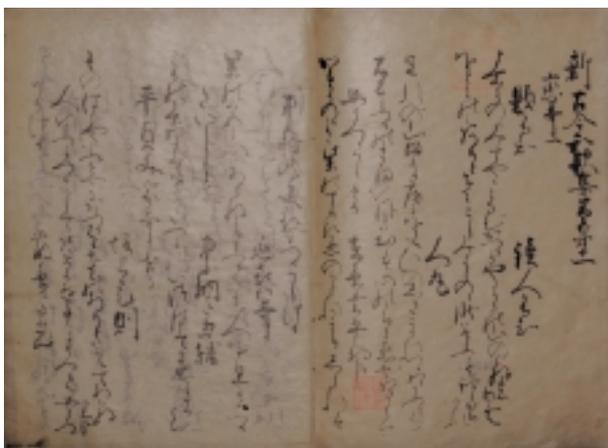
4 散木奇詞集



3 清少納言家集



5 長秋詠草



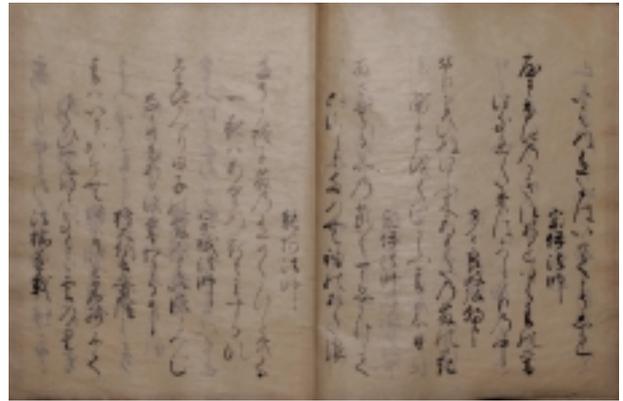
7 新古今和歌集



6 六百番歌合



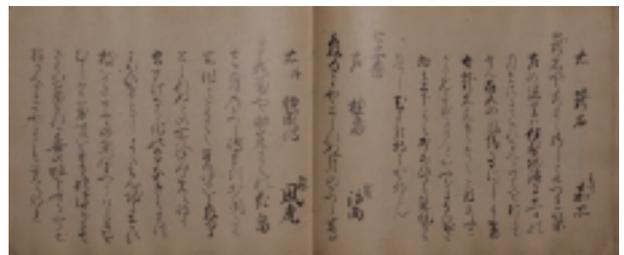
9 賦何船連歌



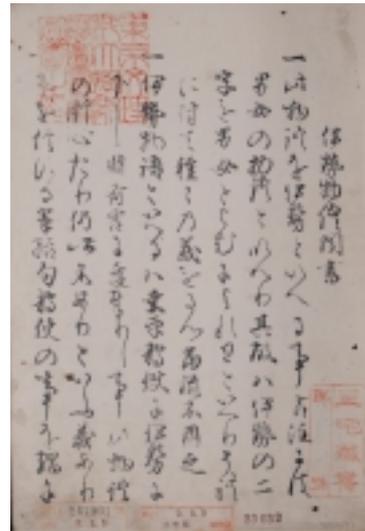
8 新撰菟玖波集



11 遊系日記



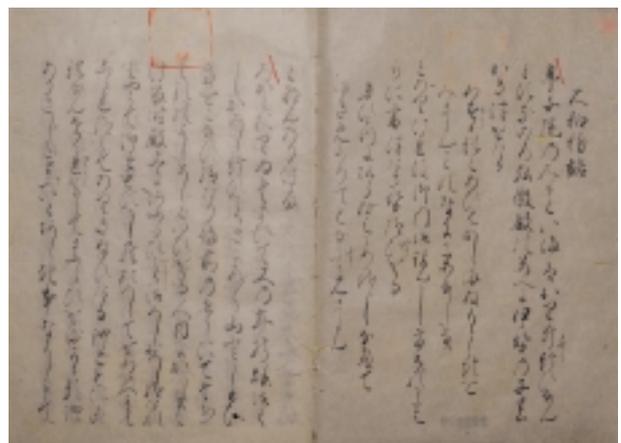
10 奥州名所百番誚諧発句合



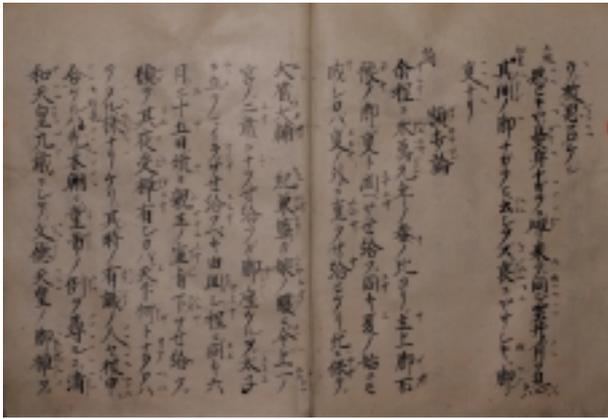
12 伊勢物語聞書 (肖聞抄)



14 うつほ物語



13 大和物語



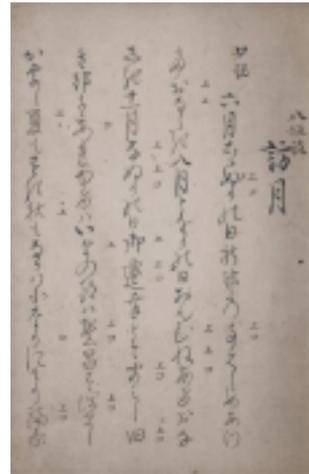
16 平家物語



15 〔源氏小鏡〕



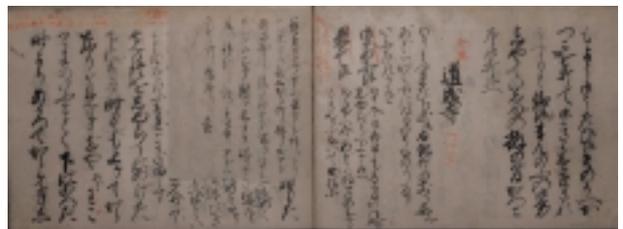
18 〔謡本〕



17 八坂流平家物語 訪月巻



20 〔住吉物語絵巻〕



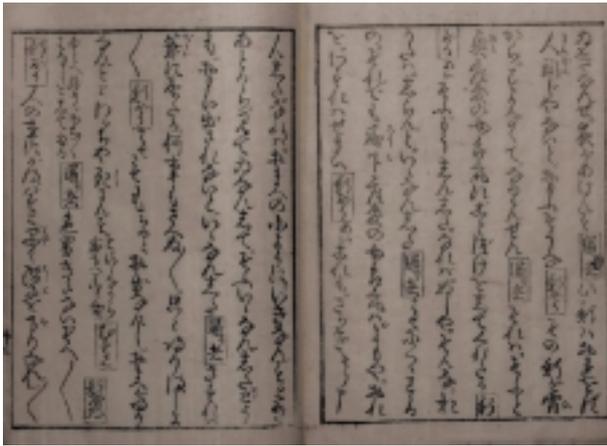
19 問之本



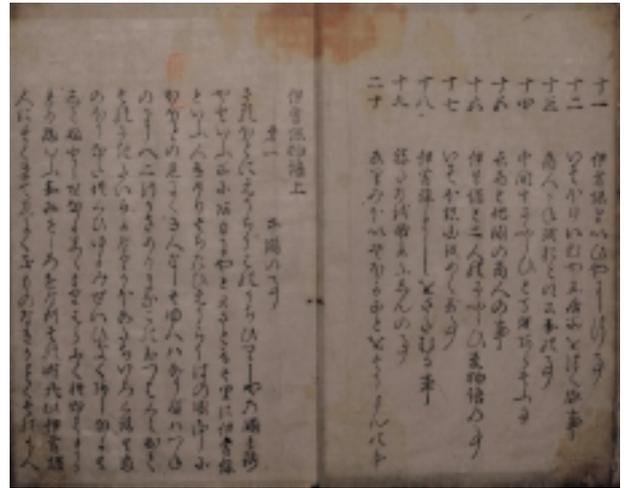
22 〔文正草子〕



21 〔しやかの本地〕



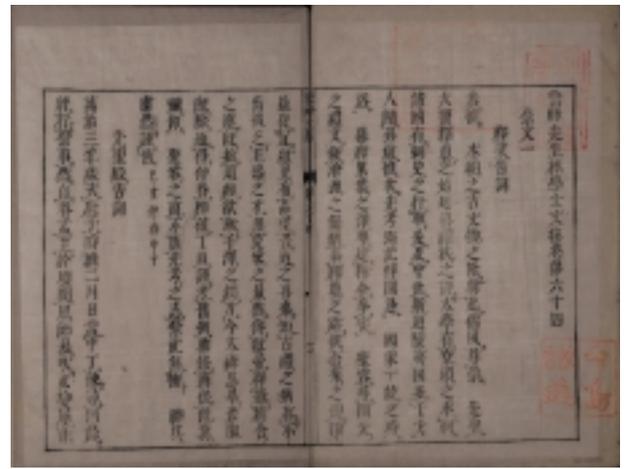
24 遊子方言



23 伊曾保物語



27 水滸後伝



26 鷲峰先生林学士全集

25

歷世大儒像（聖賢像軸）
邵子



周子



程叔子





29 南総里見八犬伝



28 笑府



31 鯰絵



30 合三國小女郎狐



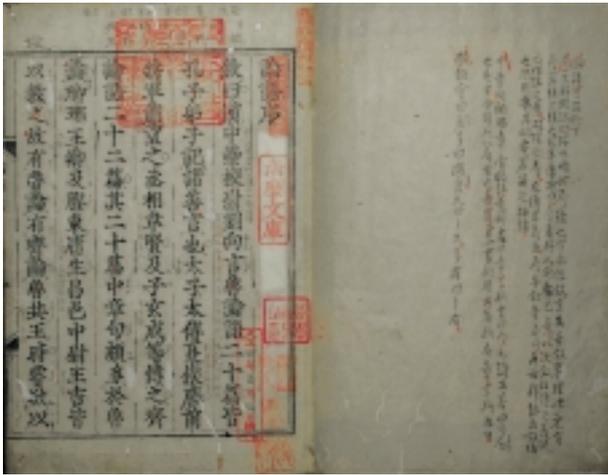
朱子



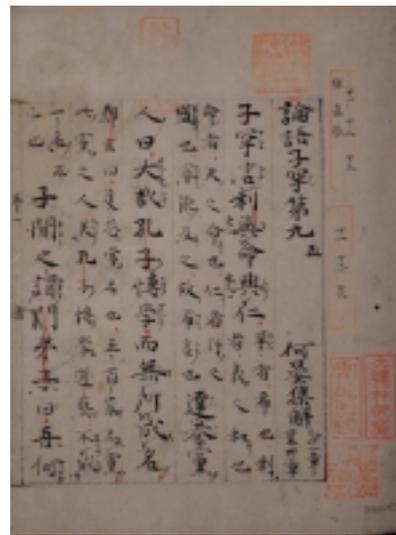
張子



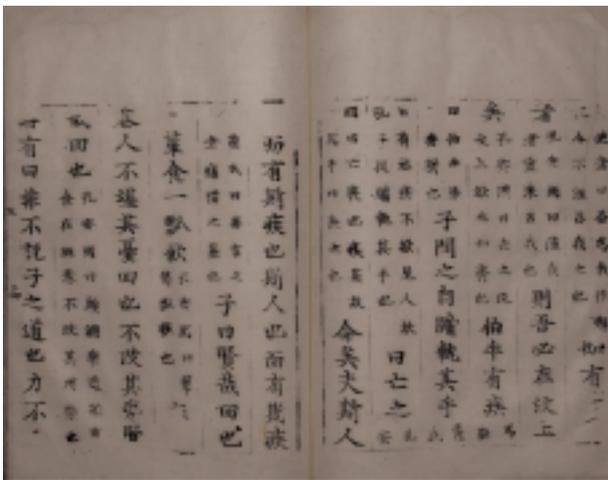
程伯子



33 論語〔集解〕



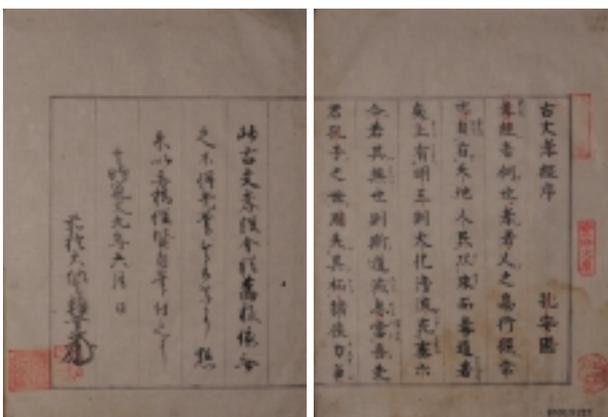
32 論語集解



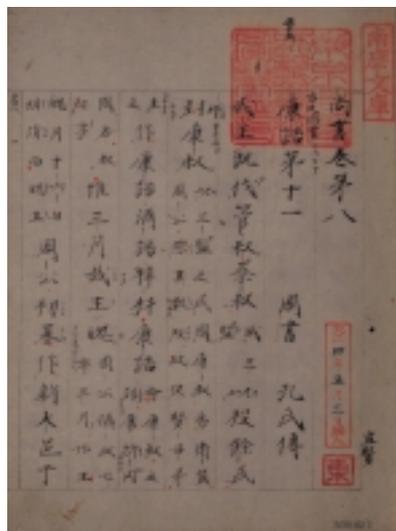
35 論語集解



34 論語〔集註〕



37 古文孝經



36 〔古文〕尚書

古代の学問に関する貴重図書

過去の学術研究についての深い理解と、適正な批判があつてこそ、学術研究の進展がもたらされる。大学附属図書館である当館は、先人の学術研究の成果を記した研究書・注釈書、学術研究の基礎となる教科書・辞書の収集にも積極的である。「まなぶ(学ぶ)」という言葉が「まねぶ(真似ぶ)」に由来するように、学問や技芸の最初は、師の教え・芸を手本として真似ることから始まる。手本を真似て書く、「写す」という行為の所産である写本は、その意味では学術研究の基礎的図書ともいえる。

当館所蔵最古の写本、奈良時代の天平六(七三四)年写『大智度論』は、仏教研究のみならず信仰に基づく写本であるが、内容は教典の注釈書であり、白墨の訓点によって、平安時代の興福寺の学僧がこの漢文をどのように解釈し弟子たちに伝えていたのかが示されている。梵語の発音の研究書『悉曇要決』、天台密教の注釈書『十八契印』、真言宗の法会での声明の譜面『聲明集』、禅宗の『人天眼目』を室町時代の学僧が講義した聞書『人天眼目鈔』、それぞれ価値の高い写本である。

仏教と並んで日本の学問の根幹をなしたのが儒教である。『古文孝経』は、博士家の学問を伝える写本であり、『歴聖大儒像』は儒教が信仰でもあったことを示している。また、室町時代以降の学問の広まりは、『下学集』『節用集』『倭玉篇』などの実用辞書がこの時期に出版されていることから知られるが、これは日本の印刷技術の発展と深く関係している。そして、隣国との江戸時代の文化交流を示す『隣語大方』、地方における学問の普及を示す『字鏡』の豪華な写本。

これらの貴重図書は、それぞれの時期の学術研究の水準を示す重要な資料であるだけでなく、記された日本語はまた当時の日本語の実態を知る貴重な資料ともなっている。

三八 大智度論(だいちどろん) 卷第七十一 一軸

天平六(七三四)年写。

紙高一三・七cm。料紙一九枚継ぎ。一紙の長さ五六cm前後。全長一一二m。

『大智度論』は『摩訶般若波羅蜜經』の注釈書で、龍樹(りゅうじゆ、一五〇頃～二五〇頃)南インドの仏教者、ナーガールジュナ)著といわれ、鳩摩羅什(くまらじゆ、三四四～四一三)が漢訳。般若の空の思想を問答体で解説したものとして有名。

本書は当館所蔵最古の写本で、石山寺一切経の黒印がある。「天平六年歳次甲戌十一月廿三日写針間国賀茂郡既多寺ノ物部連大山」という二行の奥書があり、播磨国賀茂郡既多寺(現在廃寺)において写経され石山寺に勧進されたもの。また、天安二(八五八)年に、興福寺大詮大徳がこの書について講義した際の読み方を伝える訓点(第一群点)が白点で記入されており、初期訓点資料としても貴重。石山寺旧蔵本大智度論百巻は、太平洋戦争後一部が流出し、現在は四十巻が石山寺に残るのみ。本書巻七十は、昭和二十七年、二万五千元で購入したものの(当時の公務員の初任給は六千五百円)。

三九 悉曇要決(しつたんようけつ) 四巻 四帖

〔室町時代〕写。天福二(一一三四)年 信毫(しんこう)筆写の奥書。

縦二五・二cm、横一六・五cm。粘葉装。

天台宗の学僧明覚(めいかく、天喜四(一〇五六)年、未詳)著の悉曇学(サンスクリット語・梵語の学問)についての研究書。明覚は比叡山で学び、加賀温泉寺(現石川県山代温泉薬王院という)に住し、悉曇学に関する研究を数多く残した。本書は、梵語の字相字義や発音について、漢字片仮名交じり文の問答体で解説したもので、梵語の発音現象の説明に日本語の発音の例を挙げて説明したところもあり、当時の梵語研究の水準を知るだけでなく、当時の日本語を知る上でも貴重な資料である。康和三(一一〇一)年以後の成立と推定されており、本書は治承五(一一八二)年と天福二(一一三四)年の識語を持つ最古の写本で、室町時代の書写。

第二次大戦後の古書市場に現れた本書の価値を見極め、「文字反」(高山寺旧蔵)とともに購入したのは、当時の東京教育大学附属図書館長能勢朝次であった。

四〇 十八契印（じゅうはちげいん） 一枚（一一紙継ぎ）

〔鎌倉時代中期 建保年間（一一二二丁―一一二九）以降〕写。
紙高約二六cm、全長四三二cm。

契印（げいん）は密教の修法で、両手の指をさまざまに組み合わせさせて印相を結び、所定の真言を唱えれば諸仏の加持を実現できるとされる。二世紀頃からの仏像の出現に伴って、その手・指の表現形式が契印として定着した。空海の撰とされるが、唐の惠果の著とする説もある。修行者が本尊を迎えるために、身を清め身仕度する護身法（莊嚴行者法）として五契印、本尊を迎える道場を定める前結界法として二契印、道場を飾る道場莊嚴法として二契印、用意した車に乗って道場の空中まで来た本尊を室内に請じ入れる勧請法として三契印、響応をさまざまげる魔障が入りこまぬよう四方を固める後結界法として三契印、本尊を沐浴させ美しい座に坐らせてもてなす普供養法として三契印、以上合わせて十八契印。

本書は本文・識語ともに同一筆とみられ、識語に見える良修・行観・円忠・仙朝などの僧名や三井寺という寺名からも、本書が天台宗寺門派園城寺において相伝されていたものと推定される。加 points 園城寺でもっぱら用いられた西墓点であることもこれを裏付けている。鎌倉期の密教の伝承・発展を知る資料である。

四一 聲明集（しょうみょうしゅう） 一冊

〔室町時代後期〕写。枡形本。

牡丹唐草紋紙表紙。綴葉装（布地にて包背）。

縦一五・五cm、横一六・五cm。

「聲（声）明」とは仏教音楽で、法会の際に僧が経文などを朗唱することを言う。詞章は梵文（サンスクリット語）、漢文（中国語）、和文（日本語）があるが、和文については「和讃」と言われることもある。奈良時代に既に様々の歌唱法があったことが知られるが、平安時代には各宗派で発達し、後の平曲や謡曲、浄瑠璃など邦楽に大きな影響を与えている。現在でも声明の伝承が残っており、なかでも真言・天台の二宗は音韻の原理・唱詠法などに豊富な伝承を残している。

本書は識語はないが、室町時代末期頃の真言声明集と推測される。所収曲目は「三礼」から「教化」までの四〇曲。全曲に墨譜・朱声点を付す。「吉慶漢語（きつきょうかんご）」には朱の片仮名で濁点が付されている。後表紙内面に「丹後田邊領泉源寺邑 笠松山泉源寺智性院」とある書入れから、本書は智性院（現在廃寺）の什物であったものと推定される。

四二 人天眼目鈔（にんでんがんげん）もくしゅう） 零本 二冊

抄者不明。〔室町時代後期〕写。
縦二四・五cm、横一八・五cm。両冊とも同一筆。

本書の原本である『人天眼目』は中国南宋の晦巖智昭の撰で淳熙一五（一一八八）年の成立。人間界・天上界の生あるものすべての指標（眼目）とすべきは禅宗五派の宗要であるとし、五派の重要な綱要を選んで諸先達の批判・頌などを集録し、最後を宗門雑録として五派に共通の頌を載せる。本書はその『人天眼目』の注釈書。五山版『人天眼目』をもとにしての講説と見て不都合はないように思われる。原本の綱・細綱ごとに漢文本文を記し、一・二字下げて片仮名交りの抄文（注釈）を記す。「シタソ」「デハナイソ」などのように、室町時代の話しことばによる講義口調で注釈がなされており、当時の日本語を知る上でも貴重な資料である。朱引・朱点入り。漢文本文には訓点を付し朱墨の傍訓を施す。

本書の第一冊の内容は「臨濟宗」で、前一〇丁前後が欠失しているが、初冊と推定され、第二冊は終冊「宗門雑録下」であることから、おそらくは全文について書写され、元来は五・六冊の構成ではなかったかと思われる。

四三 下学集（かがくしゅう） 二巻 一冊

〔室町時代中期〕写。大本。

縦二七cm、横二一・二cm。

『下学集』は文安元（一四四四）年に「東麓破衲」とつるくのはのう、東山の麓の貧乏僧」と称する京都東山の僧侶が編集した意義分類の国語辞書。書名は『論語』（憲問篇）の「下学而上達」にちなんだもので、室町時代に通用する語を中心に約三千語を、十八の部門に意義分類して漢字表記し、カタカナの読みと漢文による注記が付されている。中には長い注記もあり、字引きとしてだけでなく、天文・地理・草木など様々な知識を得られる教科書としての役割も果たす便利な書であり、現存するだけでも四十種以上の写本がある。

本書は現存する室町時代の写本の中でも、原型に近い本文を有する完本として貴重である。また、当館には文明一七（一四八五）年写の『下学集』（下巻のみ）があり、書写年の明らかなものとしては静嘉堂文庫蔵文明一一年写本に次ぐ古さである。

四四 節用集(せつようしゅう) 易林本 下巻(上巻欠) 一冊

慶長二(一五九七)年 易林刊。整版。

縦二八・七cm、横一〇・六cm。

『節用集』は、室町時代中期に編集されたいろは引きの国語辞書。書名は『論語』『史記』などに見える「節用」(節約する、また、必要のあるときに用いるの意)に由来すると考えられるが、序文などがなく、原本の編集者や成立年は不明である。ただし、収載語や注記から『下学集』に依拠して編纂されていることが明らかで、『下学集』以降の成立と推定されている。漢字や意味を知りたい言葉が、「いろはにはほへと……」と初めの音から簡単に引けるといふ、いろは順と意義分類を組み合わせた配列の優れたアイデアが広く識字層に受け入れられ、室町中期以降江戸時代を通じて『節用集』という名の様々の写本、版本を生み出していった。

本書は、『節用集』の版本のうちでも古く、乾本系統の代表的な版本である易林本節用集で、いろは四七部(付「京」十門、収載語は約一万五千。当時すでに発音では区別のなくなつた「い・ゐ」「え・ゑ」「お・を」を「定家卿仮名遣ひ」で区別しようとしている。易林本にはいくつかの異版があり、本書は平井休与が関わつた平井版。他に草書版も当館に所蔵する。

四五 倭玉篇(わごくへん・わぎよくへん) 三巻 三冊

慶長一八(一六一三)年刊。整版。

縦二七・一cm、横一〇・五cm。

『倭玉篇』は室町時代の代表的な漢和辞書。中国の字書である『玉篇』(梁の顧野王撰、五四三年成)にちなんだ書名であるが、序文等もなく編者や成立年については不明である。最古の写本は長享三(一四八九)年のものであったが、関東大地震で焼失し、東北大学附属図書館蔵延徳三(一四九一)年写本が現存最古である。『新撰字鏡』『類聚名義抄』『字鏡』など先行する漢和字書や『広韻』『大広益会玉篇』など中国の字書の影響のもとに生まれた、部首分類の字書であるが、分類や注記だけでなく書名も異なる異本や改修本も多く、江戸時代以降明治まで多様な版本も刊行され、漢和辞典の代名詞となつた。

本書は江戸時代の『倭玉篇』の代表的な版本である慶長一五(一六一〇)年整版本の再刻本で、部首数四七七、配列は『大広益会玉篇』に従つており、注文にも『大広益会玉篇』を和訳したものが見られる。

四六 隣語大方(りんごたいほう) 九巻 一冊

〔江戸時代中期〕写。

縦二一・七cm、横一七・一cm。袋綴。

『隣語大方』は、日本における朝鮮語学習書で、雨森芳洲(一六六八〜一七五五年)を中心に編纂されたものと推定され、対馬と朝鮮との貿易の実用面から公買易関係の語、文例が多い。ハングル文を本文にして日本語の傍訓対訳を配する。これをもとにして李朝正祖一四(一七九〇)年同じ書名の朝鮮版本一〇巻が印行されている。(朝鮮版は仮名交り日本文を本文とし別にハングルの本文を立てて対訳する。)

日本における隣語大方は明治に至るまで写本のみで伝わり、殊に九巻本(他に存するものは零本または四巻本)で、更に序文(一七五一年)のあるものは本書が唯一のもの。学習書の原型を知ることのできる貴重な資料であるだけでなく、当時の日本語・朝鮮語の実態や日朝両国の外国語研究史上でも注目される文献である。

四七 字鏡(じきょう) 三巻 三冊

〔江戸時代後期〕写。秋葉義之筆。

縦三五・七cm、横一九cm。金銀砂子表紙。袋綴。

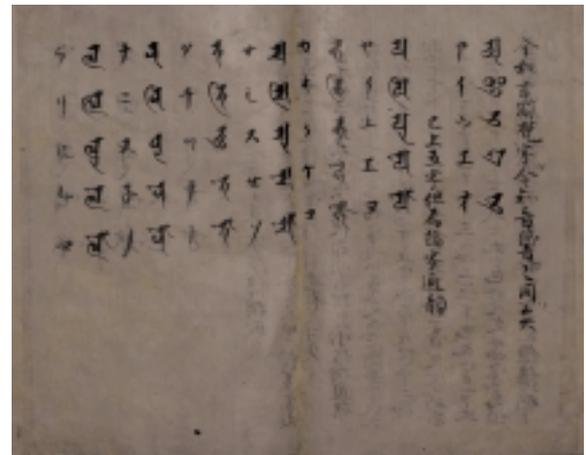
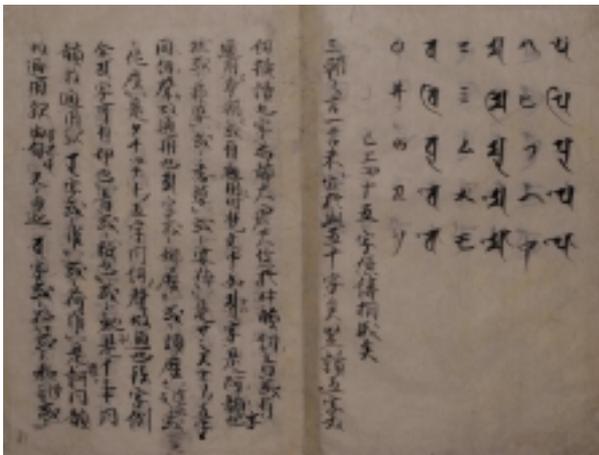
『字鏡』は平安時代末期頃成立の漢和辞書で、著者は法相宗の学僧とも推定されているが、成立年代ととも未詳。現存最古の写本は東洋文庫蔵の世尊寺本字鏡で鎌倉時代の書写とみられ、部首「目」篇から雑部まで六十三篇の零本。原本は漢字を部首によつて二百篇に分類し、字体・字義・発音・和訓を記したものと推定されている。『新撰字鏡』や『圖書寮本類聚名義抄』など先行する漢和辞書の影響がみられ、和訓を豊富に収載しており日本語の辞書史上貴重な文献である。

本書は下総国結城郡崎房村(現茨城県石下町)の名主、秋葉義之(孫兵衛)の書写になるもので、東洋文庫蔵本系統の写本であるが、同系統五冊本の付録部から「車」「女」の部を添写しているのが特徴である。

*秋葉義之(孫兵衛) 秋葉家は代々孫兵衛と三太夫を襲名した。義之は国学に造詣深く黒川春村・村田春海等の学者を招いて交誼を結んだ。下総に史書の少ないのをなげき珍本異本三千余巻を集めるなど、資料の収集に尽した。明治四(一八七一)年没す。



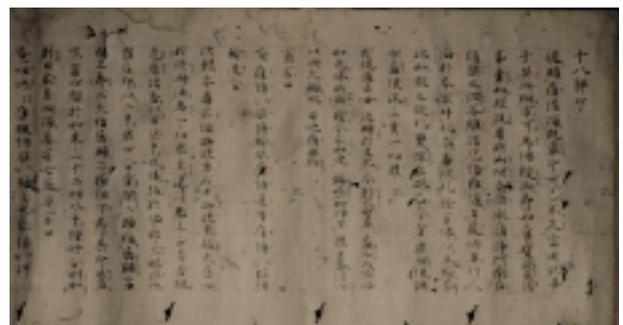
38 大智度論



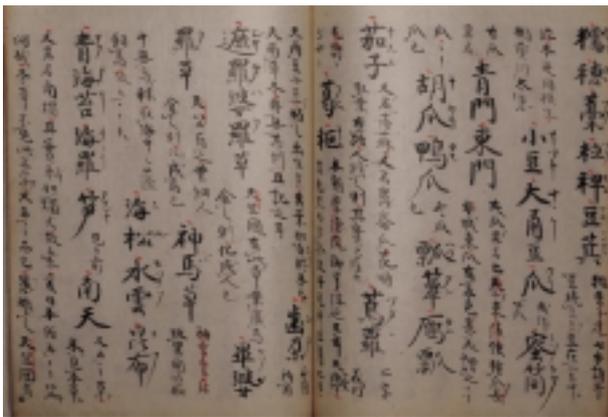
39 悉曇要決



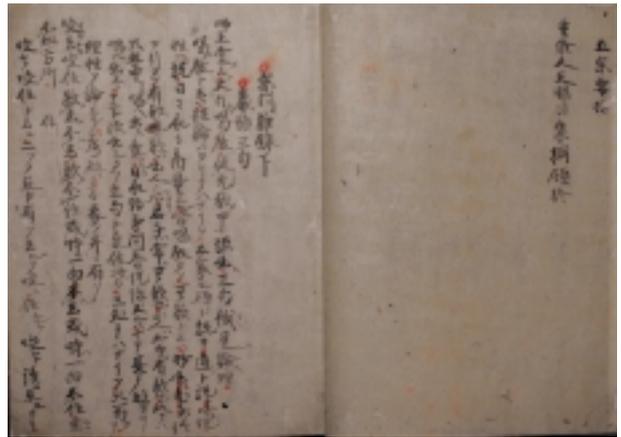
41 聲明集



40 十八契印



43 下学集



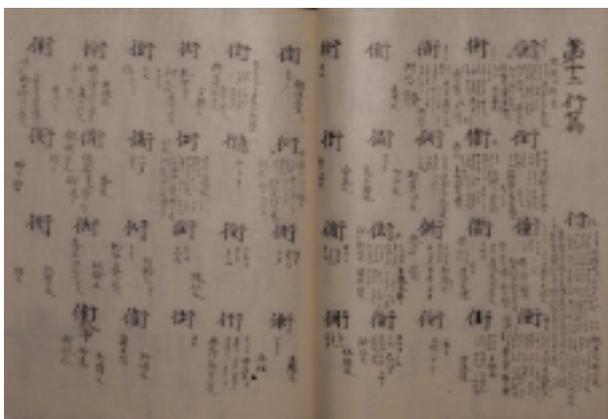
42 人天眼目鈔



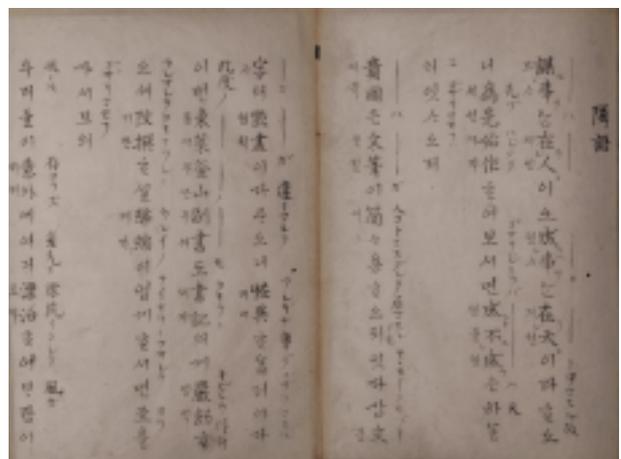
45 倭玉篇



44 節用集



47 字鏡



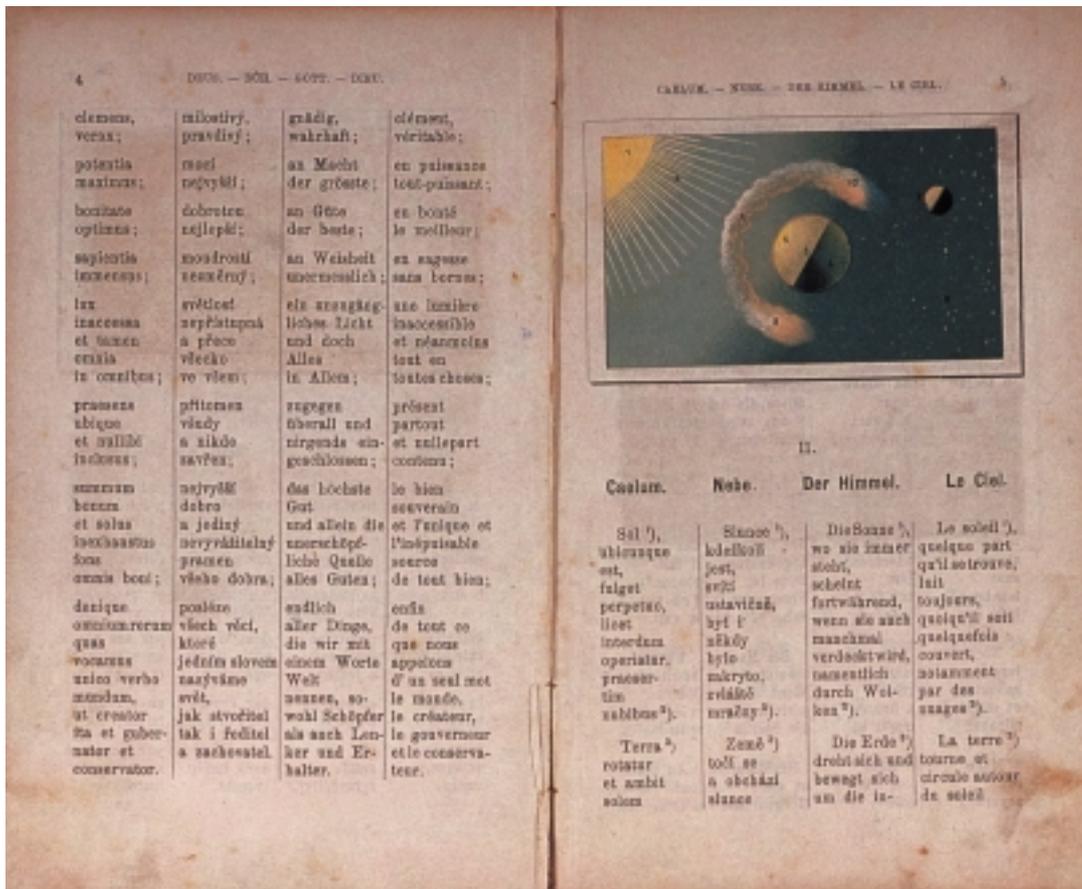
46 隣語大方

15世紀に**ゲーテンベルク**（1394 / 99 ~ 1468）が発明したとされる活字印刷術、とりわけ聖書の出版は、16世紀の宗教改革を準備するものだった。書物の量産化は、それまでエリートに独占されていた知識と情報を一般大衆に開放することで、近代化に拍車をかけたのである。特別展では17~18世紀に刊行された辞典類を中心に、知の媒体としての書物の役割を見ていく。

ボヘミア生まれの教育学者**コメニウスの『世界図会』**（1658）は、日常生活に結びついた知識を図版を用いて子供たちに与えようとした絵入り教科書であるが、項目がアルファベット順に配列されており、百科事典のさきがけとみなされている。

本格的な百科事典と呼べるのは**チェンバーズの『サイクロペディア』**（1728）あたりからだが、そのフランス語訳出版という企画から出発した**『百科全書』**（1751~80）は、ディドロやダランベールが編集に加わることによって性格が一変し、全35巻からなる近代知の一大集成となった。百科全書にかかわり、フランス革命の思想的源流となった啓蒙哲学者たちの著作も合わせて展示されている。

この他、電子化された資料（19世紀パリの舞台衣裳）をディスプレイに映し、参観者に図像を自由に見てもらうコーナーを設けた。



2 コメニウス『世界図会』1658~1883年
（初版のウィーン版リプリントから、ロンドン版、ニュールンベルク版、プラハ版など計7版）
Johann Amos Comenius, *Orbis sensualium pictus*, 1658~1883

in via australi. Et mensus est a porta usque ad portam in via australi. centum cubitos. Et introduxit me in arcum interius ad portam australem: et mensus est portam iuxta mensuras superiores thalamum eius et frontem eius. et vestibulum eius huiusdem mensuris: et fenestras vestibulorum eius in circuitu quinquaginta cubitos longitudinis et latitudinis viginti quique cubitos: et vestibulum per circuitum longitudine viginti quique cubitos: et latitudine quinq; cubitorum. Et vestibulum eius ad arcum exteriorum: et palmas eius in fronte: et octo gradus erant quibus ascendebat per eam. Et introduxit me in arcum interius per viam orientalem: et mensus est portam secundum mensuras superiores thalamum eius et frontem eius et vestibula eius sicut supra: et fenestras eius et vestibulum in circuitu longitudine quinquaginta cubitos: et latitudine viginti quique cubitos: et vestibulum eius id est arcus exterioris et palme relate in fronte eius hinc et inde: et in octo gradibus ascendit eius. Et introduxit me ad portam que respiciat ad aquilonem. Et mensus est secundum mensuras superiores thalamum eius et frontem eius et vestibulum eius et fenestras eius per circuitum longitudine quinquaginta cubitorum et latitudine viginti quique cubitos: et vestibulum eius respiciat ad arcum exterioris. et relata palmas in fronte eius hinc et inde: et in octo gradibus ascendit eius: et per singula gazophilacia ostium in frontibus portarum. Ibi lavabunt olocaustum. Et in vestibulo porte due mense hinc et due mense inde: ut immolet super eas olocaustum et per peccato et per delicto. Et ad latera exteriora quod ascendit ad ostium porte que pergit ad aquilonem due mense: et ad latera altera ante vestibulum porte due mense. Quatuor mense hinc et quatuor

mense inde: per latera porte duo mense erant super que immolabant. Quatuor autem mense ad olocaustum de lapidibus quod erant resiste longitudine cubiti unius et dimidii: et latitudine cubiti unius et dimidii: et altitudine cubiti unius: super quas ponant vasa in quibus immolet olocaustum et victima. Et labia rari palmi unius: resista incinsec per circuitum. Super menses autem carnes oblationis. Et extra portam interiori gazophilacia cariorum in arcu interiori quod erant in latera porte respicientis ad aquilonem: et facies eius contra viam australem: unaque ex latera porte orientalis que respiciet ad viam aquilonis. Et dixit ad me. Hec est gazophilacia quod respicit viam medianam sacerdotum que respiciet in studiis templi: porro gazophilacia quod respicit ad viam aquilonis sacerdotum erit que respiciet ad ministrum altaris. Ipsi sunt filii Sadoch qui accedunt de filiis levi ad dominum: ut ministrant ei. Et mensus est arcum longitudine centum cubitorum: et latitudine centum cubitorum: per quadratum: et altare ante faciem templi. Et introduxit me in vestibulum templi: et mensus est vestibulum quinq; cubitis hinc et quinq; cubitis inde: et latitudine porte cuius cubitos hinc: et cuius cubitos inde: longitudine autem vestibuli viginti cubitos et latitudine undecim cubitos. Et octo gradibus ascendebat ad eam: et colunne erant in secundis: una hinc et altera inde.

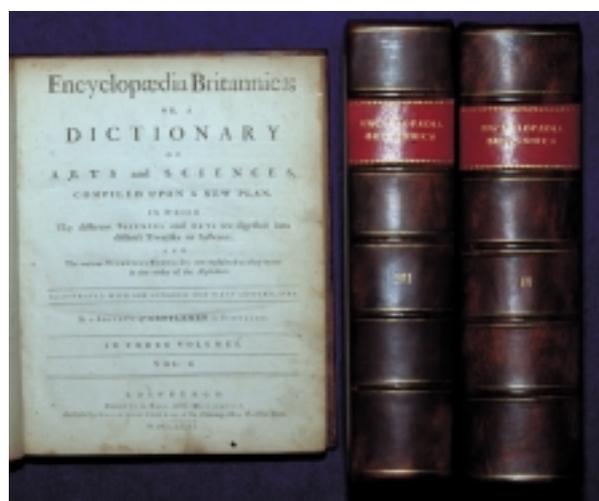
Et introduxit me in templum: et mensus est frontes. sex cubitos latitudinis hinc: et sex cubitos latitudinis inde. Latitudo tabernaculi et latitudo porte decem cubitorum erant: et latera porte quinq; cubitis hinc: et quinq; inde. Et mensus est longitudinem eius quadraginta cubitorum: et latitudinem

エフレム・チェンバーズ(1680頃~1740)の『サイクロペディア:世界芸術科学辞典』2巻、(1728)はジョン・ハリス著『技術辞典』(1704)につづき、イギリス2番目の百科事典。科学に力を入れ、項目をアルファベット順に配列しており、国外でもよく使われた。デイドロの『百科全書』編集の動機をなすものといわれる。

『ブリタニカ百科事典』(初版1768~71)は世界的に著名な百科事典で、エディンバラの版画家アンドリュー・ベル(1726~95)と印刷業者コーリン・マックファーラー(1745頃~93頃)が、印刷業者で学者のウィリアム・スメリー(1740~95)に編纂を依頼し、2段組4つ折り本100分冊を毎週刊行しはじめ、完結後に3巻にまとめたもの。特徴として、従来のアルファベット順に項目をならべるのではなく、科学の原理を体系的に叙述する試みをおこなった。



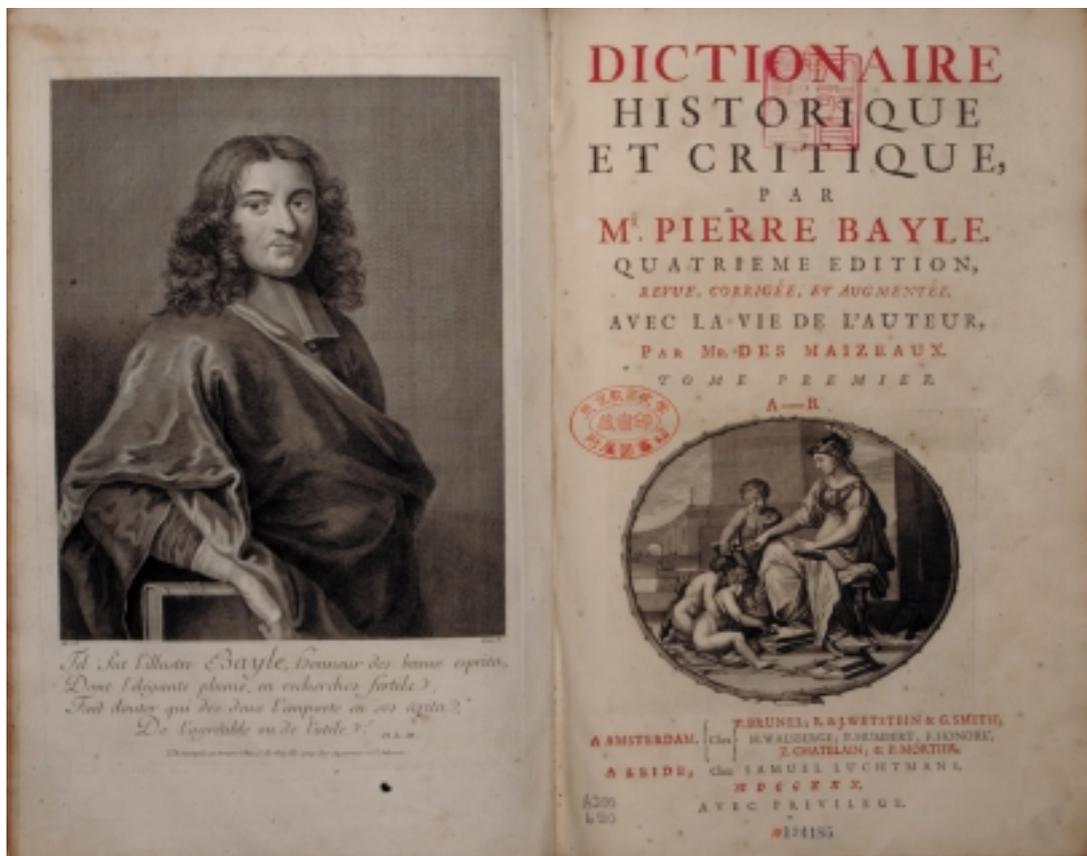
- 3 チェンバーズ『サイクロペディア』初版, 2巻, 1728年
E. Chambers, *Cyclopaedia, or, An universal dictionary of arts and sciences*, 2 vols., 1728



- 4 『ブリタニカ百科事典』初版, 3巻, 1771年
Encyclopaedia Britannica, or, A dictionary of arts and sciences, 3 vols., 1771

ピエール・ベール(1647~1706)は、フランスでのプロテスタント迫害の時代を亡命者として主にオランダで活動したフランスの哲学者である。思想の自由に通じる宗教的寛容の主張は現代的でさえあるが、神学・形而上学批判の側面をもつ大作『歴史批評辞典』は、18世紀に広く読まれ、啓蒙思想の形成に大きな影響をあたえた。項目の総数は2000余で人名が多く、膨大な脚注がつけられ、歴史記述の不正確さや歪曲への批判がなされる。哲学・神学の論議も展開され、アナクサゴラスからライプニッツにいたる哲学体系への批判は鋭く、『百科全書』へも盗用された「スピノザ」の項は名高い。

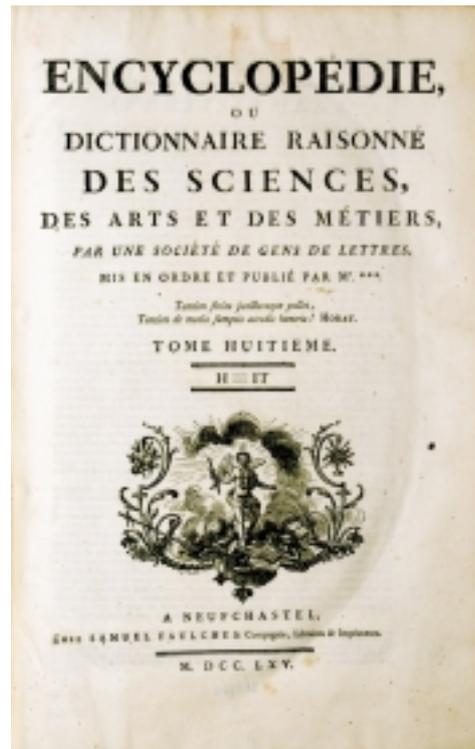
フランス啓蒙主義の記念碑的事業といえる『百科全書』は、当初イギリスで成功をおさめたチェンバースによる百科事典の翻訳として企画された。しかしディドロとダランベールが編集責任者となり、その構想は翻訳を超えるものとなっていく。イエズス会による攻撃、国王諮問会議による発禁処分などの危機を乗り越え、21年を要して完成された。200人をこえる執筆者は、ヴォルテール、モンテスキュー、テュルゴーなど時代の著名な哲学者、科学者、文人である。そして工芸の記述と図版の作成には多くの無名の職人が協力している。



5 ベール『歴史批評辞典』第4版, 4巻, 1730年
P. Bayle, *Dictionnaire historique et critique*, 4 vols., 1730



『百科全書』第1巻（パリ）



『百科全書』第8巻（ヌーシャテル）

出版地がパリからスイスのヌーシャテルに変更になったのは、第1巻刊行後に発禁処分になったため、国外出版を偽装することで刊行を継続した。第1巻の扉の頁下についていた「国王の特認」PRIVILEGE DU ROYという文字が第8巻からは消えている。



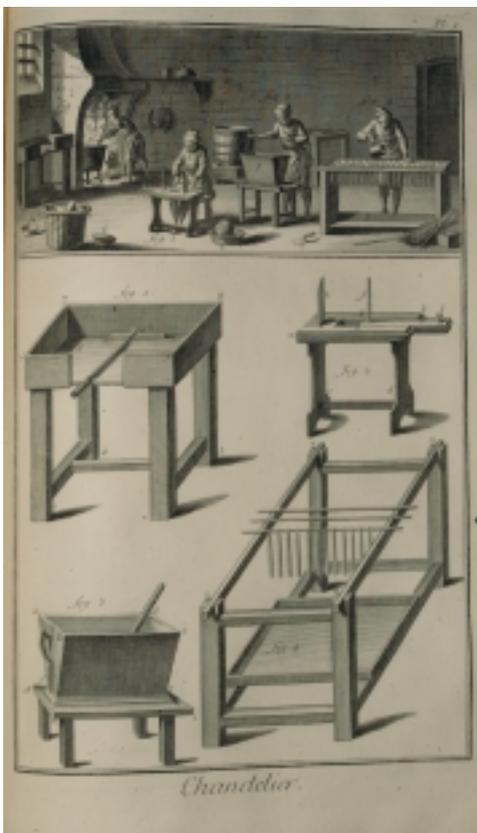
6 デイドロ/ダランベール『百科全書』全35巻, 1751~1780年
Diderot et D'Alembert, *Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, 35 vols., 1751-1780



Anatomie, Pl. I, Planches Tom I



Sculpture Fonte des Statues Equestres, Pl. I, Planches Tom VIII



Chandelier, Pl. I, Planches Tom II



Histoire Naturelle, Insectes, Pl. LXXXI, Planches Tom VI

美しく装丁された書物は、思想の媒体であるだけでなく、それ自体が工芸品であり、貴族やブルジョワのサロンを飾る家具でもあった。19世紀になって版元製本により装丁が画一化される以前は、書物は所有者の必要や好みに合わせて装われるのが常識だった。

本のサイズもまた書物と読者の関係を反映している。『百科全書』(縦40cm)はフォリオ(2つ折り)と呼ばれるサイズであるが、モロッコ皮で装丁された大型本は持主の富と教養を誇示する室内装飾でもあった。『エミール』『人間論』や『ヴォルテール全集』(縦20~21cm)はオクターボ版(8つ折り)で、今日でも小説や哲学書にはこのサイズのものが多い。一番小さい『エルベシウス全集』(縦13cm)は12折りで、ポケット版サイズということになる。大革命直前のパリ風俗を描いた作家メルシエは、『タブロー・ド・パリ』の中で、小型本の流行に触れ、人々が本をポケットに入れて散歩や旅行に出るようになったと書いている。時代の変化に合わせて、サロンの装飾から路上の読書へと書物の役割も変わっていったのである。



- 7 ルソー 『エミール』 初版, 4巻, 1762年
J-J. Rousseau, *Emile, ou de l' éducation*, 4 vols., 1762
- 8 エルベシウス 『人間論』(死後出版), 2巻, 1773年
Helvétius, *De l'homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, 2 vols., 1773
- 9 『ヴォルテール全集』 全70巻, 1785年
OEuvres complètes de Voltaire, 70 vols., 1785
- 10 『エルベシウス全集』 全13巻, 1795年
OEuvres complètes d'Helvétius, 13 vols., 1795

ロマン派演劇がフランス演劇界を支配していた19世紀半ば、パリの各劇場で上演された演劇作品中の衣裳をまとった俳優を描いたもの。色彩も鮮やかに描かれた669枚のリトグラフ（石版画）は、ドレ、ラコーシー、ラサール、ケドロウなどの画家によるものである。

様々な役割を演出するための衣裳や髪型が、演ずる俳優とともに克明に描かれた記録集的要素もあり、西洋演劇史のみならず服飾史資料としても極めて貴重な資料である。

いきいきと表情豊かに描いた表現と技法に、4人の画家の個性が感じられる大変楽しい図版資料である。

全10巻中の7巻所蔵。



Tom 4, 384



Tom 2, 188

- 11 ロマン派演劇色彩衣裳図集『ギャラリー・ドラマティック』7巻, 1844年
Galerie Dramatique, 7 vols., 1844

筑波大学附属図書館関係年表 ― 一三一年の歩み ―

- 一八七二（明治五） 東京に師範学校開設
旧昌平黌の跡地で授業開始
- 一八七三（明治六） 東京師範学校と改称
蔵書数一一三八三部（和漢書八二五六、洋書三二二七）
- 一八八六（明治一九） 高等師範学校と改称
- 一九〇二（明治三五） 東京高等師範学校と改称
大塚窪町に本校校舎が完成し図書館も大塚に移転
- 一九〇三（明治三六） 図書館主幹制度を設け初代主幹に三宅米吉教授就任
二代目主幹に松井簡治教授就任
- 一九一（明治四四） 蔵書数一〇万冊を突破（和漢書約八万六千、洋書約一万八千、合計約一〇万四千）
- 一九一六（大正五） 西館火災により和漢書約五千冊、洋書約三千冊が焼失
- 一九二九（昭和四） 東京文理科大学設置、図書館には館長がおかれ初代館長には松井簡治教授就任
二代目館長に諸橋徹次教授就任
- 一九三二（昭和七） 附属図書館新築竣工
- 一九三三（昭和八） 戦災により和漢書約三万七千冊、洋書約一万冊が焼失
- 一九四五（昭和二〇） 東京教育大学発足（東京文理科大学、東京高等師範学校、東京農業教育専門学校、東京体育専門
学校の合併による）
- 一九四九（昭和二四） 東京教育大学附属図書館設置
- 一九六七（昭和四二） コメニウス文庫受入

- 一九七三（昭和四八） 筑波大学開学
- 一九七四（昭和四九） 附属図書館設置、蔵書数約七五万八千冊（和書約四九万四千、洋書約二六万四千）
- 一九七八（昭和五三） 体育・芸術図書館開館
- 一九七九（昭和五四） 医学図書館開館
- 一九七九（昭和五四） 東京教育大学蔵書移送終了、蔵書数約一〇五万三千冊（和書約六五万一千、洋書約四〇万二千）
- 一九七九（昭和五四） TULIPSによる電算処理開始
- 一九八一（昭和五六） 中央図書館開館
- 一九八五（昭和六〇） オンライン蔵書検索サービス開始
- 一九八七（昭和六二） 中央図書館が第一回日本図書館協会建築賞（優秀賞）を受賞
- 一九八九（平成一） 蔵書数一五〇万冊を突破（和書約八七万六千、洋書約六四万三千、合計約一五二万九千）
- 一九九二（平成四） 大塚図書館開館
- 一九九三（平成五） 日曜開館実施
- 一九九五（平成七） インターネットによるTULIPS蔵書検索サービス開始
- 一九九八（平成一〇） 中央図書館新館（増築）竣工
- 一九九八（平成一〇） 附属図書館ポランティア導入
- 一九九八（平成一〇） 特別展「天正少年使節と『原マルチノの演説』」を開催（これ以降毎年特別展を開催）
- 一九九八（平成一〇） 電子図書館システム導入
- 二〇〇二（平成一四） 蔵書数二〇〇万冊を突破（和書約一八万二千、洋書約八六万二千、合計約二〇四万三千）
- 二〇〇二（平成一四） 図書館情報大学と筑波大学の統合
- 二〇〇三（平成一五） 蔵書数約二四一万三千冊（和書約一四四万一千、洋書約九七万二千）
- 二〇〇三（平成一五） 筑波大学・図書館情報大学統合記念公開シンポジウム「電子図書館の軌跡と未来」開催
- 二〇〇三（平成一五） 「筑波大学開学二〇周年（創基一三二年）記念附属図書館貴重図書特別展」開催

図録編集

統括責任

林 史典（附属図書館長）

執筆

谷川多佳子（哲学・思想学系教授）

立川 孝一（歴史・人類学系教授）

荒木 正純（文芸・言語学系教授）

石埜 敬子（同）

稲垣 泰一（同）

犬井 善壽（同）

芳賀 紀雄（同）

大倉 浩（同 助教授）

清登 典子（同）

石塚 修（同 講師）

谷口 孝介（同）

白井伊津子（同 助手）

大塚 秀明（現代語・現代文化学系助教授）

太田 圭（芸術学系助教授）

篠塚富士男（図書館情報システム課）

編集

石埜 敬子・芳賀 紀雄・大倉 浩・立川 孝一

表紙デザイン

田中佐代子（芸術学系講師）

写真撮影

岡部 幸祐（図書館部情報管理課）

特別展企画

30周年記念附属図書館特別展企画検討委員

林史典（附属図書館長） 立川孝一 芳賀紀雄

江口勇治 辻中豊 秋本克洋 西原清一 太田圭

企画協力 寺田光孝（図書館情報学系教授）

図書館部 川野茂美（図書館部長） 伊藤則男 田中成直 松田實

展示担当

附属図書館特別展ワーキング・グループ

篠塚富士男（主査） 氣谷陽子 川久保美津江

大久保明美 岡部幸祐 上原由紀 山内琢

渡邊朋子 奥村洋子 真中孝行

筑波大学開学30周年（創基131年）記念

附属図書館貴重図書 特別展

平成一五年九月二十九日

発行 筑波大学附属図書館（館長 林史典）

〒三〇五―八五七七 茨城県つくば市天王台一―一―一

TEL（〇二九）八五三―三三四八

印刷（株）イセテ

〒三〇五―〇〇〇五 茨城県つくば市天久保二―一―一〇